

報 特 攻 会
 平成13年5月
 第47号

〒105-0001 東京都港区
 虎ノ門3-6-8 第6森ビル
 財団法人 特攻隊戦没者
 慰霊平和祈念協会
 電話 03(3432)1090
 F A X 03(3432)5567

編集人 田中賢一
 発行人 木村元正

特攻隊慰霊祭

第22回合同慰霊祭は4月30日に靖国神社で恒例通り行われた。合同とは陸海軍航空特攻、空挺特攻、水進特攻、水中特攻等我々が慰霊顕彰の対象としている特攻戦没者をいふ。本回参加者合計350名。



花の都の靖国神社
 庭の梢で咲いて会およ

献 吟 石橋 一歌ほか
 詩 永野 秋則

風蕭々月半輪煌 太白中天島島蒼
 運命定茲空決戦 敢然當敵艦勳芳
 今日も亦黒潮躍る海洋に
 飛び立ち行きし友は帰らず
 紅顔痛未桜花蕾 今夕又翔求巨筋
 飛燕不帰無限思 英魂鎮此漲雷光

霊

靖国神社に於ける特攻隊慰霊祭に捧ぐ
 花の都はやすくのに 庭の梢で咲いて会おと
 手拍子とりて歌いたる 君が面影消ゆるなく
 遙かな空に浮かぶ雲 これが我らの墓標ぞと
 魂かけりゆく一筋に 日の丸そめし鉢巻きの
 大和心に咲く花は 散りて青史に残せし名
 九段の宮居に鎮まりて 現世の姿見給うか
 後に続くを信ずると 君が記せし筆のあと
 かなしき命つみ重ね つみ重ねして護らむに
 お国の爲と言う事の 絶えて久しき世となりぬ
 我らが力足らざるを 詫びて額づく神の前

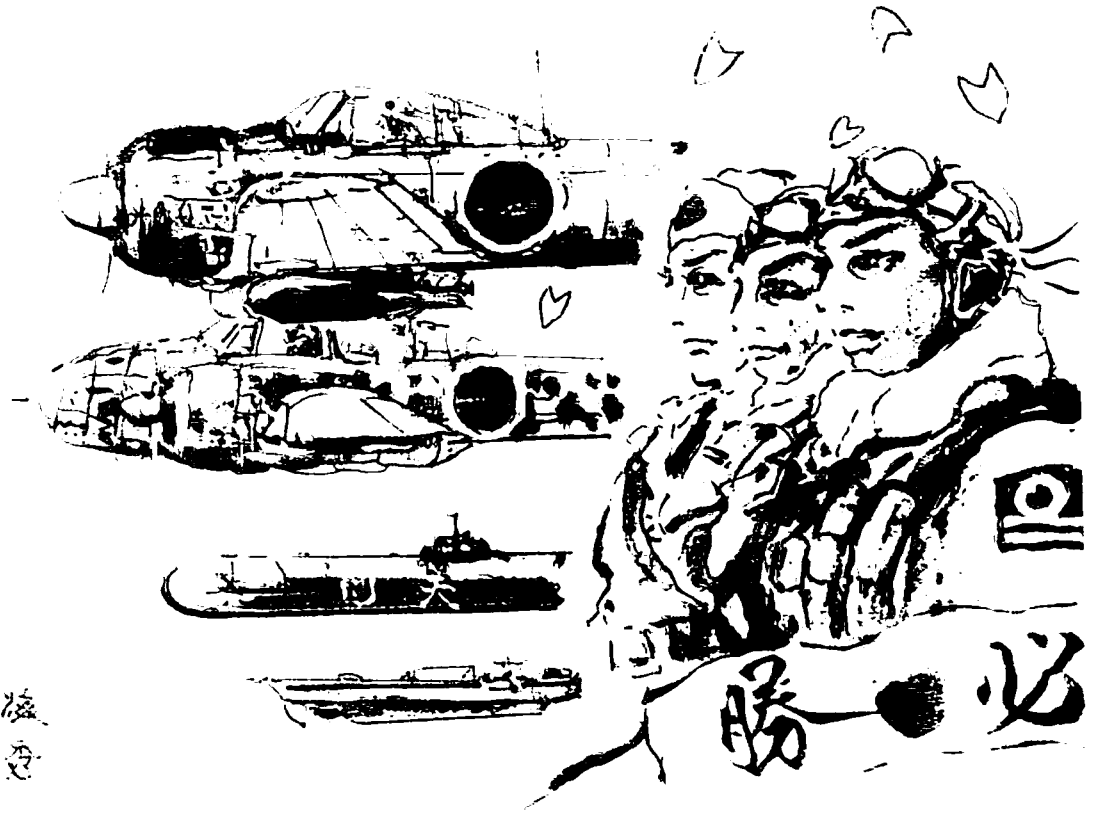


少飛会海法秀 一画



目次

靖国神社における合同慰霊祭……………1
 回天秘話 第二十三突撃隊……………3
 感動を覚えた一文……………8
 陸軍滑空部隊の生い立ちから終末まで……………9
 義烈空挺隊の起用がきまるまでの経緯……………16
 忘れ難い人たち(空挺)白井恒春中佐……………19
 正気の歌に拾う特攻隊員の正気……………22
 特攻隊員の人を恋うる歌②……………25
 劇映画「ホタル」……………27
 岩田辰夫追悼文……………28
 元第一挺進団長中村大佐の手記補足……………28



必勝

特攻烈士に捧ぐ

レイテノ空に風荒れて 魂走り征くか特攻の
 かなしき命つみ重ね なきかずに入る梓弓
 仇なす船の群がりて 兇敵集うレイテ湾
 敷島の大和心の一筋に 朝日に匂う山桜
 万朶の桜競い咲き その名も高し富岳隊
 後に続くを信ずると 一語残して飛び立ちぬ
 南十字の星のもと 呼ぶ神風は訪れず
 撃滅の夢果敢なきも 語り伝えん一棋局
 驕敵迫る西陲に 全軍あげて特攻と
 その先駆けの体当たり 本土の基地は燃えたちぬ
 人生僅か五十年 夢幻と人はいう
 その半にも充たずとも 見果てぬ夢に悔ゆるなし
 余す命はたらちねに 献上すると遺書の文字
 世界戦史に類いなき 万古に薫る大和魂
 回天の震洋と わだつみ揺るがす戦神
 七首もて心胆刺すがごと 鬼神たじろぐ必殺行
 神州犯す醜驚の 一機たりとも遁さじと
 碧空閃く迅雷か 身もて護りし大八州
 あ、特攻の大精神 汚濁に満ちた現世を
 正さんすべは何かある 學べ特攻の大精神

回天秘話

「第二十三突撃隊」出撃の日きたらず

—高知県須崎に布陣していた回天部隊は、8月13日に即時待機の態勢に入ったが—

基地回天隊

潜水艦作戦（玄作戦）回天を使う作戦）をつづけて来た回天ではあったが、敵泊地付近の警戒が厳重となり、その海域への到着すら困難となった。加えて潜水艦の被害が増加しつづけたので、碇泊艦襲撃を中止し、作戦行動中の艦船、すなわち航行艦襲撃へ切り替えることとなった。

このときに前後して、本上決戦準備のため、20年4月8日、「決号作戦準備要綱」が陸海軍大本営から発令された。これは敵の来攻予想海面を中心として、各種特攻兵器を展開、水際作戦に使用、敵機動部隊および輸送船団に打撃を与えることを重点としたものである。

これで、停滞していた本上決戦準備が促進されることになった。時まさに戦艦大和を中心とした菊水作戦が、敵艦上機の反復攻撃を受けてあえなく失敗し、大和は沈没、残余の

艦も打撃を受け、事実上、連合艦隊が姿を消した時期であった。

河崎 春美

河崎 春美
天隊は、20年4月25日以降、逐次編成され、突撃隊に編入された。編成総数（終戦まで）は第二回天隊から第十六回天隊までの十五隊と、未編成の一隊があった。

第二十三突撃隊

昭和20年6月20日、「第二十三突撃隊付を命ず」

これが私たち八名にたいする辞令である。第二十三突撃隊付の第七回天隊であったが、第七回天隊の進出予定地である宇佐は、第六回天隊の浦戸と第四回天隊の須崎との中間点にある、土佐湾沿いの地点である。

しかし、回天の引き出し、整備が困難な地形であり、かつ隧道工事の遅延等から、浦戸と須崎へ分割配備されることとなった。

このときの回天の輸送は潜水艦によって行なわれた。20日、在隊者総員の帽振れを受けて出発する。

列車は粗悪炭と、空襲警報、車両整備等のため、予定より三時間もおくれで、夕方、少々おそく岡山に着いた。ここで皆の意見を聞くこととなった。

岡山で一泊するか、それとも高松まで渡って泊まるかということである。

皆の意見が、列車が三時間おくれということから連絡船の都合もわからない、とにかく、行けるところまで足るのはそうということ、岡山を出発した。

どうにか連絡船にも乗船でき、灯火管制下、まっくら闇の高松で、何軒目かにたたいた旅館で一夜を送ることになった。大部屋で寝具なし、民間人も相部屋ということである。

翌朝、何はともあれ駅へ行き、須崎までの列車を調べたが、大半が高知止まりである。須崎から終点の土佐久礼まで行くのは、一日一本程度であるが、この朝は臨時便で軍輸送車が出るので、さっそく列車に乗り込んだ。

しばらく待つうちに、陸軍の兵隊が乗り込んできて、「この列車は陸軍の輸送用だから、降りてくれ」という。

そこで輸送指揮官と交渉だということになり、隊長の桜井中尉が折衝に行き、陸軍側は少尉が輸送指揮官、

こちらは中尉が隊長である。その階級差で押し切り、八名は無事席を確保できた。須崎到着は昼すぎであった。

陸軍の兵隊たちは、高知からすぐ西の伊野で下車していった。駅から見えるところにある学校に入っ

て行ったようだった。須崎ではすでに第四回天隊の展開が終わり、基地も整備されていた。私たちの回天もそれぞれの隧道に格納されていた。しかし、第二十三突撃隊の本部

庁舎はなかったので、須崎到着後は市内の吉村旅館に置かれていた司令室に、



昭和20年6月20日、光基地にて。左端筆者、前列左隊長の桜井中尉

首任の報告をすませた。それから出迎えてくれた仲間といっしょに、本隊事務室のあった箕越へ行った。

箕越へは須崎から渡し船の便があった。たいした距離ではなかったが、かなりの流れがあった。その渡し船に乗ると、船頭に代わって櫂をあやつって、若さを発散させた。

本来、箕越の舟着場のあったところは、回天隧道に近いため、石灰石を船積みするためのサイロ状の塔の真下に移動させていた。竹を組んでつくった筏を浮き棧橋として舟着場に使用していた。

この渡し船を利用する者には身分証を発行し、本隊事務所として使用している真珠会社の作業場を必ず通ることとし、この番兵に身分証の提示をさせていた。

搭乗員宿舎は、この本部事務所からゆっくり海岸沿いの道を歩いて十分足らずの串ノ浦にあった。この海岸線に隧道を掘って、通信室、発電室、回天用として使用していた。町民にはこの海沿いの道は通行禁止となっていた。

通信室と発電隧道はコンクリート造りのものであったが、回天隧道は手掘りのままであった。松の木の坑木に支えられ、回天の上方には垂れ落ちてくる雪をさけるためのトタン板が並べら

れてあった。

一本の隧道には、長さ十五メートル弱の回天を一基ないし三基、隧道の奥から海中まで敷かれたレールの上の台車に乗せて格納してあった。

海岸まで迫った山の隧道は、傾斜度はいささか大きくなく、海中へのびたレールと隧道の入口は、偽装網に木の枝を差し込んで偽装をしてあった。南国の夏の日射しを受けて、木の枝は数日たつと枯れるので、つねに新しいものを補充しなければならず、基地の兵隊たちの手の抜けない日課の一つであった。

この回天隧道の手前の狭い道端にある草むらのなかに、無造作に放置されたものがあつた。

よく見ると、戦闘機等がよく使用する燃料タンク（落下増槽）であつた。こんなところになぜ増槽が、とふしぎに思い、あちこちをしらべて見ると、「MADE IN USA」とある。前の方には釘か何かでほり込んだものでも「FOR KYUSHU」とあつた。

空襲の途次、米機が落としたものと思うが、前線に来たという実感がした。

搭乗員宿舎

回天隧道が箕越の先から串ノ浦の方へ五本並んでいる海岸沿いの道を行く

と、串ノ浦部落の手前のところに、魚雷艇隊がいた。そのはずれに、部隊のいわゆる裏門番兵が、二十四時間実弾を装填して立っている。

その番兵に「搭乗員」とことさらに重々しげに告げて通り抜けると、串ノ浦部落である。

農家ばかりの小さな部落で、兵舎等を建てる場所もなく、わずかな小さい神社の横に、バラック建てを立てたものの、搭乗員の居住区はない。農家の一部を借用して、二軒に分宿していた。

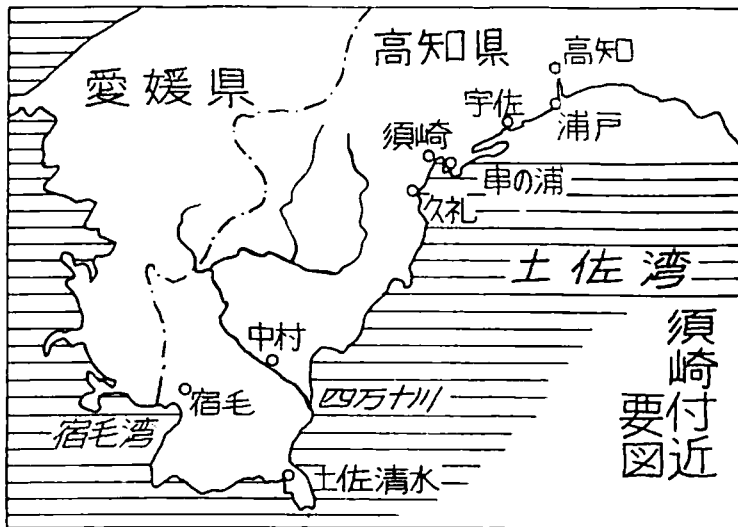
この部落には橋本姓が多く、先着は橋本真治家、われわれは橋本補吉家に居住した。ただし、食事は定員分隊の若い兵隊が運んできて、食事用意をしてくれていた。

橋本家では、われわれをどのようか考えていたか、終戦のころになって聞いてみたことがある。

先任下士官が来て、近日、士官が来られるので、その心算でいるようにと家の人に話したらしかたが、それから数日後に

われわれが首任したわけである。ところが、もちろん士官もいるにはいるが、大半が下士官で、しかも飛行靴をはいている。どうなったんだと先任下士官に聞くと、搭乗員だとのことで、安心したよ

うな、その一方で特攻隊員をどうすればよいのかと、思案に窮したようである。



着任したその日、その家の三男坊（小学校入学前年）に、搭乗食のなかの熱量食であるチョコレートを食べさせたところ、生まれてはじめてお日にかかるものだから、ふしぎそうな顔をしていた。

しかし、一つ食べるとオイシイと言うので、どんどん食べさせた。

われわれの方は、先任の連中から歓迎会をやるとういので、適当に飲んで寝込んでしまった。

朝になって起きたところ、この家の主婦から、「うちの子供に何を食べさせたのか」と問い詰められた。何のことか、と考え直してやっと思い出した。チョコレートだと答えると、子供は昨夜は一睡もせず、そのうえ、下痢で何回もトイレに通ったとのこと。

同じ部隊にいても、新兵さんは腹をへらしていつも食べ物さがついていたが、どうしてこんなになっちゃうのか、とふしぎな顔をしていた。

訓練

課業整理には全員本部に集結し、その後は各自、自分の回天に乗り込むことになる。

整備員から調子を聞き、発進準備や、調速ロット、調深ロット、人力舵等の

操作や、ベント弁柱や金氏弁の操作によるツリム作成などを行なう。

あるいは二人一組となってやる場合もある。一人が乗り込み、ほかの一人が浮上、潜入の指示につづいて、浮上時の観測データを与える。

搭乗員はこれを受けて要変針角、すなわち斜進石または左何度、調深何メートル、調速何ロット、と言いながら操作をするのである。

あるときは宿舎で観測訓練のみであったり、資料作成（基地回天隊としての）であったりした。

午後の課業は主として室内作業で、軽くやった後、昼寝ですごす。

夜に入るのと最大の訓練をする。

回天は機密兵器であるため、その引き卸し作業は、暗くなってから行なう。

この訓練はほとんど無灯火で行なうので、馴れるより仕方がない。しかし、夜には米機による空襲のため中断されることが多く、ことに七月に入ると、毎日定期便のように来襲した。

「一八三〇、X号隧道前整理」の号令が基地員に発せられる。搭乗員および整備員は別段の指示なく必ず集合し、作業の中心となるざるを得ない。この回天引き卸し作業は、敵接近、回天戦が発令されたときに行なうものである。おそらくは頭上に敵機が飛び交い、

その合い間をぬってやる作業であるから、応召兵や弱年兵では、見ているわけにもいかず、こちらもつねに手を出してしまう。

X号的引き出し、かかれ」と同時に、われわれはストップブウォッチを押す。

作業員は隧道入口とレール上のカムフラージュをのぞき、回天を乗せた台車にワイヤーをとりつける。そして海中にあるフックに滑車をかけ、神楽機と称する手巻きウインチを使用してワイヤーを巻き、回天を海中まで引き出す。

想定では、これで回天が発進して行くことになる。回天が隧道を出るまでに搭乗員は乗り込み、発進用意を行なう。

回天が海中に引き卸されたときに、先のストップブウォッチを止める。そして作業後の講評で、本日の訓練は何分何秒かかった、もっと早くやらねば敵機にやられるぞ、とか適当にハッパをかける。

苦勞して引き卸した回天だが、訓練だから、また元へ戻さねばならない。こんどは逆の引き上げとなる。上り傾斜だから、なかなか骨が折れる。毎夜、この作業の終了は十時半ごろとなる。

深夜観測訓練

「決号作戦ニ於ケル海軍作戦計画」によると、「特攻攻撃ニ当リテハ黎明薄暮月夜等大象ノ極度利用ヲ計ルト共ニ」とある。

もっとも、こんな条項の有無に関係なく、基地での搭乗訓練に黎明、薄暮の訓練を行なっていた。もちろん、自主訓練である。

先の回天引き卸し訓練終了後の、午前零時ごろから和船を漕ぎ出し、湾口外まで出て行く。

その途中に、隊の裏門番兵の沖を通る。すると「誰か」と誰何がある。この誰何を三回繰り返す間に返事をしなければ、発砲してもよいことになっている。

それを承知のうえで、三回目が終わるのを待ちかねたように、声小さい、やり直せ」と怒鳴る。

番兵はあわてて発砲するのを忘れ、声を大きく「誰か」と言ってくる。そこでわざとゆっくり「搭乗員」と答えて通過する。

こんないたずらをしながら深夜の海に出かけていくが、闇に引きずり込まれるようで、あまり良い気持ではない。瞳孔をできるだけだけ広げて、暗夜（わずかに月光などがある）の状況で地形

がだいたい判別できるようにする訓練で、二時間ぐらいかかった。

同じ二十三突撃隊の浦戸基地では、当番制でこれらの訓練のほか、下士官巡邏を組んで高知市内を巡回したり、学生や一般市民の姿に化けて「密偵」となって船着場、公園の見晴らし台、駅近辺等に出かけていったりした。

当時、スパイ(二世か?)が出没し、夜になると懐中電灯で交信していたので、それらを捕らえるためであった。その警察権のようなものを与えられていた。

木札に「密偵証」^二二十三突^一の焼印を押し、身にまとうものは、ふんどし以外のものは軍のものを使用しない。学生帽、ハンチング帽等を借り、労働者、学生をよそおい、拳銃一挺を持ってあちこちを歩きまわる。

しかし、不審者を連行できず、逆に憲兵から不審者と目をつけられたり、警察からは、登校拒否か不良学生と見られたり、あまりサマにはならなかった。

われわれが高知へ進出したのが二十六年六月下旬で、ちょうど七月上旬ころが山桃の食べきである。

高知の山桃は粒が大きく、なかなか美味であった。裏山に特徴のある山桃

の木を見つけたが、これは橋本寅治さんの山だった。そこで、頼みこんで山桃をちょうだいすることにした。

これには木の下に蚊帳を広げ、一人が木に登ってあちこちの枝をゆさぶると、山桃の紫色がかかった濃赤色の実がバラバラと落ちてくる。

そこで吊り手を引き寄せるという寸法である。しばらくの間は山桃で楽しませてもらった。

沿岸視察

八月に入ると、戦況もますます切迫感が強くなってきた。

それはポツダム宣言の受諾、あるいはソ連の宣戦布告、はたまた原爆投下などが予感されたためであろうか。とにかく、張りつめた糸がいつそう強く張られたような、そんな風な感じであった。

そこで、出撃あるいは襲撃にあたっては、地形を知ることが緊要であるため、沿岸の視察が必要となる。そうした提案がなされて、さっそく実行することになった。

搭乗員は可能なかぎり全員参加、さらに浦戸隊もできるだけ参加させる。

視察航程は、四万十川の川口にある中村市までで、期間は約一週間。使用

船は鯉船一隻をチャーターしてこれにあてることになった。

と、いうわけで須崎を出港したのは、広島に原子爆弾が投下された翌日であった。

沿岸視察であるから、海岸沿いに入念に調査をつけ、この日は土佐久礼までの調査を終えた。その夜は船中泊で、翌八月八日に久礼湾をもう一度一周し、上の加江まで調査をつづけた。

この日は上の加江で鯉節工場と、精米所を営む大きな家を見つけ、一泊をお願いしたところ、心よく引き受けていただいたので、調査終了後、この家に集結し、調査結果を報告し合った。

一部の者は船中泊としたが、他はこの家のご好意により一夜をすごすこととなった。その夜半、船で宿直をしていた者が、本隊からの電信呼び出しを受けたところ、ソ連の参戦、満州への侵攻を知らせてきた。

さっそく、その受信紙を持って陸上に報告に来たため、対策を討議した。その結果、掃投することとなり、計画は二日間をもって中断されてしまった。

即時待機

8月12日ごろ、夜8時すぎ、本部より電話があり、

「搭乗員ただちに本部に來れ」とのことである。さっそく全員宿舍を飛び出し、裏門番兵の前も駆け足のまま通過する。

本部にて整列、報告を終えると、特攻長から、

「陸軍見張所からの情報によれば、敵機動部隊が潮岬方面に接近中、明朝土佐沖に來襲するものごとし」とのこと、回天隊はただちに出撃準備、身辺整理のうえ、

「明朝〇六〇〇以降即時待機」との命令が出された。

「明朝〇六〇〇以降即時待機」とは、明朝六時以降はすぐ発進できるようにして待機せよ、ということである。

このとき、即時待機は全員か、発進順はどのようになるか、ということが問題となった。

とりあえず今回は二名、ただし状況によって追加、全員となる可能性もある。用意するように、今回の二名は、隧道の都合上、坂田と河崎とする。——そう隊長から改めて指示された。

しかし、この指名も「俺が俺が」と皆が騒ぎ出したが、結局、機動部隊なら二名だけではないだろう、状況を見てからでもよいのでは、ということになり、指名どおり決定した。

指名を受けた坂田と私は、ただちに

整備員に人念整備と、間違ひなく明朝六時までに、一液(トリクレンという脂肪をとる液)の注入、電気信管の結線等々、発進可能にしてくれるように指示した。それから宿舎へ戻って、身辺整理にかかった。

身辺整理といっても、私物は基地を出る際に整理しているので、アルバムと少数の手紙程度しかない。これらは一切焼却してしまった。

万一、米軍が上陸して来た際、この家に迷惑をかけると申し訳ないという理由のみであった。その他は回天に持ち込むストッブウォッチ、懐中電灯、海図、射角表だけである。

さっぱりしたところで、一杯やるか、ということになり、用意をはじめっていると、本部から従兵にビールをかつがせて予備士官(基地員)がやって来た。最初で最後だろう、仲間に入れると割り込んで来た。

人数もふえ、部屋ではせまいので、天気も良く月も出ているので庭でやるう、ということになり、ムシロを敷いて月見の宴となった。

別れの宴という暗さはなく、残る桜も散る桜、時間の差だというので、つねになく盛り上がった。

とはいっても庭の一角、建物のかけで橋本さん一家が、何度声をかけても

応じず、じっと見つめておられたのが印象に残っている。

翌朝六時前、回天隧道に行くときは、橋本さん一家はすでに農作業に出かけたあとで、別れの声をかけることはできなかった。この夏は、空襲だ、警報だと、農作業もままならず、比較的安心して仕事のできる早朝からの農作業が多くなっていた。

この日の即時待機は、十時すぎになって、「機動部隊は関東方面に転針した。回天戦用意具納め」となって、ねずみ一匹も出ずに終わった。

8月15日のころ

8月15日は高知も暑い日だった。朝の課業整列において、正午に重大放送がある、全員それぞれの場所において聞くように、と予告されていた。

それで、「何のことかな?」程度で、午前中は通常どおりの訓練をした。

宿舎で早めの食事をすませ、並四と称する真空管ラジオのポリウムを上げて待機していたが、全国なみの雑音の多さと、何となく耳慣れないイントネーションに、ほとんど理解できなかった。

午後の課業整列で説明があるだろう

ぐらいに考えて本隊へ向かったが、裏門番兵が通さない。

聞くと、本隊から指示があるまで誰も通すな、とのことだった。

責任は俺たちが負うからと強行突破して進むと、士官たちは通信隧道の前に立っていた。通信科の短波で受信していたようで、理解できたということであった。

課業整列は十五分ぐらいおくれたが、横山指令から「終戦」になった旨話される、一同決して無分別な早まったことをするな、と念を押された。

午後はまったく何も手につかず、どうしたら良いかわからない。いままで体験したことも聞いたこともない事態の発生に、とまどうばかりである。突然そこいらに拳銃を撃ち込んで、腹の虫を押さえるのが精いっぱいであった。

夜に入って、並四のラジオにスイッチを入れると、サイパンからの日本向け放送が入り、

「ただいまより敵性音楽を放送します」の案内の後、「六段の調べ」を流してきたのたいし、無性に腹を立てたりしていた。

翌16日も暑い一日だったが、海軍総隊からはまだ何の指示もない。したがって、敵が接近すれば応戦する

るので準備を整えておくように、との連絡が、消沈していたものに急に火をつけたような具合になった。

まぼろしの土佐沖海戦

8月16日午後6時30分ごろ、本部よりの連絡で、「十二時間待機」が発令された。

すでに一回即時待機を経験しているので、「よし、やってやるぞ」と発進準備にかかった。

陸軍第五十五軍司令部(四国防衛軍)より大本営への報告電。

一、敵ノ有力ナル艦船群ハ八月十六日一二〇〇頭部井岬南方約二〇〇軒ヲ北進中ナリ、又艦種不明ノ敵艦船十数隻ハ同日一九三〇頃土佐湾ニ侵入シ所在ノ我海軍部隊ハ之ト交戦中ナリ

二、集団ハ即刻戦闘準備ニ移リ得ル態勢ヲ取り非常事態即応ニ万全ヲ期セントス

三、各地区隊(支援ヲ含ム)各部隊ハ即刻戦闘準備ニ移リ得ル如ク準備スベシ

四、住民関係事項ニ関シテハ別命スとかかなり大きな戦闘態勢に入り、海軍部隊は応戦中とのことであった。

第五航空艦隊の戦闘記録には、

「高知航空隊より」正午スギ高知市南
方二五キロニ戦艦又ハ巡洋艦ノマスト
三本見ユ」との緊急電報が五航艦司令
部に入ったのは八月十六日一八〇〇の
頃」

とあり、この電報を受けた中部以西
の主要部隊で、戦闘配置について部隊
は少なくなかった。

高知市にある浦戸航空隊はこの情報
を、

「敵機動部隊、宿毛湾に進入中」

と受けたようであり、

「陸戦第一配備、急げ」

を発令、弾薬の配備、試射まで行なっ
たようである。

これらの情報の元は、二十三突撃隊
所属の高知東方にあった手結震洋隊が、
8月16日午後7時ころ、須崎の震洋隊
本部よりの無電命令、
「敵機動部隊が本土上陸の目的をもつ
て、土佐沖航行中につき、出動してこ
れを撃滅すべし」

を受け、ただちに撃撃準備にとりか
かったことに、要因がある。

すなわち、前部の三百キロの炸薬に
信管を装着し、エンジンの試運転をし
ているうちに、プラグの火花が、漏れ
ていたガソリンに引火し、燃え上がっ
た。

搭乗員は隧道のなかに退避して、し
ばらく様子を見ていたが、どうやら消
火したようだ、と震洋艇に近づいた。

ただし、近づくなという命令も出てい
たようだが、搭乗員たちは気になって、
それを無視して近づいたようであった。

そのとき突然、炸薬に誘爆し、二十
三隻の震洋がつぎつぎと誘爆、約百二
十名が死するという大惨事になった。

これが一部では、「敵機動艦隊、高
知平野東部手結岬方面砲撃中、わが方
勇敢に応戦、目下戦果拡大中」とい
うような情報になって報じられたわけ
である。

しかし、10時半すぎになって、「十
二時間待機解除、回天戦用意具納め」
となって解除された。

当然、情報が正しかったとすれば
(本当に機動部隊が接近したとしたら)
二十三突回天隊は出撃、戦死していた
と思われる。

大本営では改めて8月17日、
「即時戦闘行動を停止すべし、但し停
戦交渉成立に至る間、敵の来攻にあた
りては、止むを得ざる自衛のための戦
闘行動は、これを妨げず。二十二日午
前零時以後は一切の武力行使を停止す
る」

と電命した。

戦争はついに終わった。

特攻隊員と応召兵は早急に復員させ
よ、ということになり、8月25日に復
員させることとなった。

しかし、満足な列車も石炭もなく、
輸送力最低の状況では、客車も貨車も、
果ては無蓋車まで人を乗せた。

部隊では九州方面、関西方面とい
う具合に復員者をグループに分け、船を
調達できるところは燃料を支給したり
して、大混乱のうちに復員作業をつづ
けていた。

感動を覚えた一文

沖繩特攻を敢行した戦艦大和の、海
底の所在が確認されました。巨艦と運
命を共にした兵士の父親の一人は次の
ように詠んでいます。

散り果てし華一輪と思えども
拾ふすべなし 海のただなか

この父は四十年悲しみに耐えて来た
のでしよう。父にとつて若い息子は一
輪の華であった。このように歌に詠む
ことによつて、息子の魂を鎮めるだけ
ではなく、みずからの悲しみを鎮める
こともできるのです。戦争に関する歌
が出ましたので、学徒兵の歌を一首紹
介しておきましょう。

わが妹は母しなれば嫁ぐ日に
誰が帯結び 粧ひするらむ

出征する兄には年ごろの妹がいた。
母がいないので、晴れの結婚の日に、
誰が帯を結び化粧の手伝いをしてやる
のだろう、という意味です。万葉の防
人の歌と何とよく似ています。こうい
う。側々として胸に迫ります。こうい
う情感のこもった歌を作った作者は、
きつと勇敢に戦った人でしょう。反戦
イデオロギーといったものからは、決
してこんな歌は生まれて来ないのです。
〔祖国と青年〕61年1月号 山田輝彦



水上走行中の回天

陸軍滑空部隊の生い立ちから終末まで

田中 賢一

この標題だけみると特攻隊の記事ではないように思われるだろうが、前号で紹介した通り一部が特攻隊として起用されることになった。しかしそれは終戦により立消えになったので、戦史に登場していない。

◇

第二次大戦当時の空挺部隊には、落下傘部隊と滑空部隊とがあった。史上最大の作戦と題する映画で有名になったオーバロード作戦(連合軍のノルマンジー進攻作戦)では、空挺部隊の主体は滑空部隊だったし、イギリス軍のビルマに進入したウインゲート空挺部隊などは、滑空機搭乗部隊だけだった。我が国に於ては、滑空部隊は落下傘部隊より遅く発足したが、18年秋頃には戦力的にみて両者伯仲となった。以下滑空部隊創設の発端から順を追って辿ってみよう。

一、覚 醒

我が陸軍が滑空部隊創設を企図した発端は一九四〇年独軍西方作戦の初動における、空挺部隊の華々しい活躍に刺激されたことによる。

この年の10月欧州方面駐在の任を終えて帰国した井戸田勇中佐(35期)が、陸軍大臣邸で東條陸相以下陸軍首脳部に對し、最近の独軍の作戦について報告した。空挺作戦については特に強調して報告したという。恐らく落下傘部隊と滑空部隊両者の運用が述べられたものと思う。

その翌月、即ち15年11月30日、浜松陸軍飛行学校練習部臨時編成要領が裁可され、「落下傘部隊ノ要員養成ニ任スルト共ニ落下傘部隊ニ関スル調査研究及試験ヲ行フ」ことが、遅まきながら開始された。

飛行学校練習部に付与された任務には、まだ滑空部隊の文字は認められないうが、その萌芽は既に一部関係者の中に存在していた。

15年8月17日、航空本部第二課において、滑空機ニ関スル研究会が行われている。これに列席した飛行実験部の古林忠一大尉(42期)が、戦後まで保管していた資料によれば、滑空機を操縦教育の一段として使うことと、軍隊輸送に使うことの両者について討議が行われたらしい。

従来、操縦者要員の教育と民間における航空思想普及にのみ、グライダーの価値を認めていたのに、このとき軍隊輸送のことが浮び上ったのは、独軍

の目覚ましい活躍によることは勿論である。研究会の際配布された資料の一部を左に掲げる。

滑空機ニ関スル觀察ト軍ノ態度ニ就テ

昭和十五年八月
航空本部第二課

其一 觀察

一、作戦上ノ利用価値ニ就テ

欧州大戦ニ於テ滑空機利用ノ風評ヲ聞クモ未タ確証ヲ得ザルヲ以テ本

次戦争ヲ通シテノ利用価値ニ関シテハ未知数ニ属スルモ敵後方ニ対スル空

輸挺進隊トシテ活用スル場合現在ノ

落下傘降下ニ比シ左ノ如ク幾多ノ利

点アリ

(イ) 高々度ヨリ隱密降下ヲナシ得ルコ

ト

(ロ) 着陸点ノ選定自由ナルコト

(ハ) 武装強化ヲ可能ナラシムルコト

(ニ) 着陸時某程度ノ敵ノ攻撃ニ對抗シ

得ルコト

(ホ) 降下物体ノ重量ヲ増加シ得ルコト

以上各利点並今次独軍落下傘部隊ノ

運用等ヨリ考察スルニ將來滑空機ノ

進歩ト相俟テ之カ選定並用途ヲ適切

ナラシムルコトニヨリ特殊作戦ニ於

ケル利用価値相当大ナルモノアルヲ

想ハシム

例ヘハ將來ニ於ケル資源獲得戰特ニ

石油資源ノ如キ武力占領ニ先チ破壊防止ヲ必須トスルカ如キ場合之ナリ

(筆者註) ここに列挙してある滑空部隊の利点は、實際に研究を進めてみると一部異なる観方が出てきたが、詳しくは後で述べる。

二、航空要員教育上ノ価値ニ就テ

(筆者略)

三、國民指導上ノ価値ニ就テ

(筆者略)

四、航空人事ト学生滑空訓練トノ關係

ニ就テ

(筆者略)

其二 軍ノ態度

一、判決

軍ハ速ニ滑空機ニ関シ作戦上ノ利用

価値ヲ検討シ之カ対策ヲ講スルヲ要

ス

又作戦上ノ利用価値如何ニ拘ラス某

程度操縦ニ関スル研究並普及教育ヲ

実施スルヲ要ス

二、処置

(イ) 器材ニ関スル研究

航空技術研究所ヲシテ作戦ニ利用

シ得ヘキ滑空機ニ対シ研究ヲ命シ

之カ試作ヲ実施セシムルヲ要ス

(ロ) 操縦ニ関スル研究

一飛行学校ヲ指定シ操縦ノ研究ヲ

実施セシムルヲ要ス

(ハ) 普及教育

航空部隊及学校ヲ通シ一部人員ニ対シ相当深刻ナル教育ヲ実施スルト共ニ其他ノ者ニ対シテハ余暇ヲ利用シ可成ク教育ヲ普及スルヲ要ス

特ニ操縦教育ヲ受クシムル生徒ニ対シテハ地上教育期間ニ於テ之カ教育ヲ実施ス

(二)其他

将来ヲ顧慮シ学校配属将校ノ制度、教育並滑空機製作工場ノ指導等ニ関シ研究スルヲ要ス

以上の文書綴の後に次の一葉が綴込まれているがこれは多分その席上配布されたものであろう。白国「エーベンエマル」保塁ノ攻撃ニ使用セラレタル「グライダー」ハ2人乗ニシテ落下傘部隊ノ上兵84名ヲ空輸シタルモノノ如シ(筆者註、2人乗りは誤り)其ノ後大型「グライダー」ヲ急速ニ製作セラレアリ最小4人最大16人乗りニシテ現在ノ保有数約一万機ナリト謂フ「ナチ」飛行団ハ勿論本機製作ノタメ昼夜兼行状態ニ在リ最近ノ「グライダー」ノ性能ハ一般ニ高度ノ32倍ノ距離ヘ到着シ得ルモノノ如シ落下傘兵師団ニハ新ニ「グライダー」部隊編成セラレタルモノノ如シ

(以上某国空軍補佐官ヨリ情報入手)

15年12月、挺進練習部の看板を掲げたものの、研究員が初めて落下傘降下をしたのは、翌16年2月20日。5月には白城子に移って部隊編成要員の教育を始めたが、その頃、独軍は戦略空挺作戦を世界に展示した。クレタ島作戦がこれである。

地中海の制海権は、一方的に英海軍が握っていたが、独軍は一個空挺師団と一個空輸首陸師団をもって、クレタ島を占領した。このとき一〇〇機のグライダーをもって、マレメ飛行場に一個連隊を着陸させている。

それらの情報は間もなく我が国にも伝えられた。しかし、我が挺進練習部の現況は、数個中隊分の落下傘兵を養成するのが精一杯で滑空部隊などはまだ先のことだった。

二、滑空部隊の必要を痛感
陸軍落下傘部隊の緒戦は、申すまでもなくバレンバン作戦(17・2・14)だった。

あゝのとき第1挺進団が持っていた兵力は、落下傘兵8個中隊、輸送機4個中隊、但し落下傘兵8個中隊のうち4個中隊は海没再建中だった。

作戦準備中問題になったことが何点かあるが、その中で本論に関係あることだけを挙げてみれば、

- 1、速射砲が持って行けなかったこと。当時物料投下は総て重爆で行った。37耗射砲を数個に分解して物料箱に収納し投下することは、テストは終っていたが、車輛の梱包が大きくて爆弾倉の扉がしまらなかった。
- 2、無線機の投下に自信がなかった。内地にいるときは何回か実施したが、成功の確率が少なかった。
- 3、降下技術を習得していない者は、飛行場を占領した後でなければ行けないこと。

以上のようなことは、滑空機さえあれば容易に解決できる問題だった。種々検討した結果、輸送機1機で強行着陸することになった。その発端は挺進団長の久米精一大佐(31期)が、統率上の観点から第1次降下部隊に同行すると言い出したことによるが、飛行場近くの草原に一式貨物輸送機1機で、次の人員と速射砲1門を搭載して胴体着陸することになった。

輸送機には挺進団長久米大佐、団通信係将校上田大三郎大尉(50期)、斉藤通訳、荒木カメラマン、第16軍参謀井戸田中佐、速射砲のほか、衛生材料、軍票を入れた袋なども搭載した。

着陸した場所が膝を没する湿地だったため、速射砲を取り出すことができず、また速射砲を使う必要もなく戦闘は終わった。

余談ながら、それより1ヶ月前の1月11日に、海軍落下傘部隊がメナドに降下したが、そのときも近くのトンダノ湖に、速射砲隊と医務隊を載せた飛行艇2機が着水し、主力と合流している。これも滑空部隊の必要を示唆するものだった。

陸軍落下傘部隊は、バレンバン作戦で多くの教訓を得た。その一つに降下即突撃という戦法がある。

バレンバンでは飛行場の外に降下し攻撃したが、敵が弱兵だったため勝つことができた。相手が精兵だったら、このような戦法で勝てるだけの物的戦力を我は持っていない。軽装備小兵力で敵を懐伏させるには、目標の直上に降下し奇襲の利を最大限に發揮しなければならぬ。各級指揮官以下、このことを強く感じた。

しかし、その戦法を採用するにしても、当時の降下装備の拳銃と手榴弾だけでは、如何に精兵と雖も、完全な自信は持ち得なかった。ところが、丁度その頃シンガポールで押収したトンブソン機関短銃を受領した。これは降下

時携行できる大きかった。余談ながら、落下傘部隊用折畳小銃が装備されたのはその翌年である。

さて、戦場はビルマに移り、落下傘部隊は4月29日、ラシオに降下して雲南方面に退却中の重慶軍の退路遮断に任ずることになった。

ラシオには二目標を設定した。このとき輸送機は五個中隊あり、第1次で兵営を攻撃することにした。挺進第1聯隊の3個中隊約五〇〇名は、トンブソン機関短銃を持って兵営に直接降下の策を立てて絶対の自信を持っていた。

第2次の目標は飛行場で、二回目の空輸になるので5時間後である。奇襲の利は享受できない。兵営と飛行場は10杆以上離れていて、飛行場内にも三〇〇〇名を収容する兵舎があるという。ラシオを通して退却する敵は、2乃至4個師と判断されていた。

挺進団司令部の高級部員は木下秀明中佐(35期)で、敵の胆を奪う奇策を立てた。

輸送機三機に軽機と重機を持った部隊を乗せ、超低空で進入し飛行場に着陸、敵施設に猛射を浴せ、その隙に頭上から主力の三個中隊が降下しようという案である。少ない輸送機を潰すのは勿体ないということで、不要になつた九七重一型を充てることにした。

滑空機を使うべき戦法だった。

この頃我が滑空部隊が出来上つておれば、奇襲のみに頼ることなく、物的戦力の備わつた部隊を着陸させ、堂々たる立体包囲を計画したのであろう。

本論と関係が薄いのでここでは割愛するが滑空機があればと痛感した。この作戦は、天候不良のため第1次挺進部隊が目標に進入できず引返し、残念ながら取止めになった。

第一挺進団は、南方進攻作戦が一段落したので17年6月内地に帰還した。

同年7月22日、宇都宮飛行場で落下傘部隊の天覧演習が行われたが、挺進第一聯隊の降下に引続き、輸送機三機が着陸した。挺進団としては滑空部隊の必要性を、陛下に申し上げた積りだった。

滑空機ならば、直に火炮を卸すことができるが、百式輸送機ではそれができないので、松林の中に隠しておいた速射砲を曳出し、仮設敵の戦車に對抗した。苦しい芝居だった。

三、滑空機操縦者の教育

第一挺進団司令部が新田原に帰つたのは、17年6月4日だったが、その頃中央では航空本部の計画で、滑空機操縦教育が開始されようとしていた。そのときの計画書が現存しているので、

その概要を知ることができるが、計画書作成の日付は16年4月8日となっている。前年8月の研究会において検討したことが、このとき緒についてと言えよう。

この教育の目的は、「滑空機操縦教官ノ基幹要員ヲ教育スル」ものであつて、6月5日から7月27日まで実施した。主任教官は飛行実験部の古林大尉、専習員は各飛行学校より派遣された将校で、15名全員操縦者だった。

8週間の教育で、九五式練習機で高級滑空機を曳行することまで習得した。因に、初級滑空機はゴムで、中級滑空機はウインチで、高級滑空機は飛行機で曳航するものだった。

この教育は、将来滑空部隊の操縦者になる者だけを対象にするものではなく、専習員の中で大久保、野間、山本の三少尉だけが、陸軍挺進練習部に転属し、滑空飛行部隊の創設に携ることになる。

さて、第一挺進団は8月1日に陸軍挺進練習部に復帰した。即ち挺進聯隊と挺進飛行戦隊は、挺進練習部の隷下部隊となり、挺進団司令部は挺進練習部に吸収された。

それと前後して、挺進練習部内に滑空班と重火器班が設けられた。重火器

班は滑空機搭乗部隊の前身になるものだが、これについては次の章で述べよう。

滑空班は、前述の教官要員の教育を修了し転属して来た3人の少尉が教官となり、部内から25名の専習員を集め教育を始めた。このとき選ばれた専習員は、降下者であつて操縦者ではなかった。

中級滑空機操縦までは新田原で教育し、9月の中頃所沢に移った。そのとき挺進飛行戦隊の三嶋木巖夫中尉(53期)が滑空班長に任命され、飛行実験部の古林少佐が、挺進練習部兼務に発令され、滑空班の指導に任ずることになった。

滑空班は翌18年の春頃まで所沢にあって、古林少佐の指導で滑空機操縦の教育を行った。この間第2次25名、第3次30名と挺進練習部で降下訓練修了した者の中から、専習員を送り込み、高級機の訓練まで進んだ。また初期に滑空機操縦者になつた者は、曳航機操縦の訓練に入った。

ある日、高山中尉は高級機の訓練を受けていた。九五式練習機に曳航されたのか曳航索を翼に引っかけて墜落した。高山中尉は胸部を強打し肺が破裂して重態であつた。病院に運ばれ手

当を受けている間、逐一事故の模様を正確に供述し、再びこのような事故がないよう戒め、最後に「あゝ、くたびれた」と一言呟いて瞑目した。これが最初の犠牲者だった。

この頃、かねてから開発中の実用機「ク」――が量産に入った。詳しいことは次の項で述べるが、「ク」――は搭載量8名、謀略部隊の潜入などには使えるものだった。九七式軽爆で曳航した。

滑空班は18年春茨城県西筑波に移った。「ク」――を使い始めたのは西筑波に移ってからである。

ここで特別操縦見習士官95名を受入れ、教育を開始した。第3次までは挺進練習部内から被教育者を選ったが、第4次以降は他部隊から採用した。

古林少佐の残したメモによれば、滑空班（後に滑空飛行戦隊）で養成した滑空機操縦者は次の通りである。

第1・2次	45名	昭18・8まで
第3次	30名	昭18・9〜19・2
第4次	95名	昭18・12〜19・9
第5次	25名	昭18・12〜19・9
第6次	50名	昭19・9〜20・4
合計	約240名	

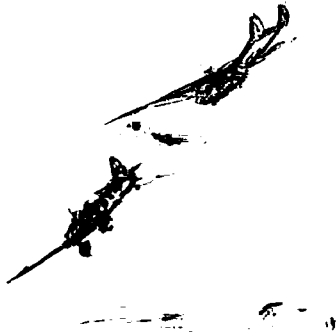
空挺作戦を行う場合、輸送機の操縦者は、撃墜されない限り何回も空輸を担当することができるが、滑空機の操

縦者は、1作戦1回限りとなるので、多勢を必要とする訳である。

教育の手順は、降下者を採用していたときは、プライマリ、セコンダリー



高山機墜落



「ク」-1 97軽で曳航

より始め、九五式一型練習機、「ク」――を経て「ク」――八に移行した。後に操縦見習士官を採用するようになってからは、九五式一型練習機4ヶ月、一式双発高等練習機2ヶ月、「ク」――八3ヶ月という体系が確立した。

四、滑空機の開発

初級、中級、高級滑空機は民間で開発されたものを使用した。当時民間には各種の滑空機があり、その中でどの機種を採用するかについての調査報告書が現存している。日付は16年4月18日、調査担任者は陸軍航空技術研究所所員、陸軍大尉古林忠一となっている。

その判決の部分だけ引用すれば、
一、初級滑空機ニ在リテハ文部省ノ型ヲ最モ適当トシ、日本式鳩型之ニ次グ
二、中級滑空機ニ在リテハ光2型ヲ最モ適当トシ、伊藤式B型及ビ日本式高型之ニ次グ
三、滑翔練習機ニ在リテハ「ゲッピンゲン」1型（光3型）ヲ最モ適当トシ、伊藤式C-1型、日本式蜻蛉型「グルーウベイベ」(霧ヶ峰鷹-1型)之ニ次グ

四、滑翔機ニ在リテハDFS「オリンピヤ」型ヲ最モ適当トシ、日本式鳳型、伊藤式C-11型之ニ次グ

五、ゴム索ハ18mm緩衝ゴム紐ヲ適当トス
六、飛行機曳航用索及捲線曳航用鋼索ハ3.5〜4mm飛行機用柔軟鋼索ヲ適当トシ、曳航用鉤ハ従来使用ノモノヲ利用スルヲ可トス

七、捲線自動車ハ乗用車又ハ貨車ニ所要ノ改修ヲ施シタル捲線曳航専用車ヲ要ス

この文書は、その内容よりも遅まきながら16年4月という時点に、このような検討がなされたということに注目する必要がある。

軍用滑空機の試作がいつ開始されたのか、現有資料では確か得ないが、16年の秋には福岡の前田航研で最初の軍用滑空機「ク」――の2号機が完成した。「ク」――は操縦者も含め8人乗ることができ、大型滑空機に入る前の操縦訓練用のものだったが、特殊部隊の空路潜入などにも使えりとされていた。

曳航機は九七軽を使った。翼面積30平方米、全備重量13屯、翼面荷重4.3キログラム/平方米、最大曳速一八〇キロ、終戦までに約一〇〇機作られた。古林少佐の手記に次のような一文がある。日付がないが17年前半のことらしい。

技研における「ク」審査は、「ク」――

一、「ク」一八、「ク」一九ともに各製作会社に試作機の完成を督促しあるも、手直し多く成果未だし。僅かにこれま
 で「ク」一一初号機の試作を了し、軍用滑空機将来のヒントを得たると、「ク」一八一型により「ク」一八八型整備機の指針を得たるに過ぎざる状況。
 しかしながら技研、実験部を通じ関係者の不断の研究により、逐次軍用滑空機の方途を見出しうるに至る。

製作会社の主なものは、飛行機製作に充たされ余裕なきため、やむなく小会社に依存せざるべからず。これがため製作遅々として進まず。また航本の施策にも積極的ならざる状況にありたることも大きな原因なり。

18年に入ってから「ク」一八八型の試作が行われ、使用部隊側の意見も十分とり入れて19年に制式決定量産に入った。会社は日本国際航空工業で、平塚工場が担当した。

「ク」一八は高翼、木金混用、楯と車輪があり車輪は離陸後離脱可能。翼面積51平方メートル搭載量1.8吨、武装兵23名、全備重量8.5吨、翼荷重69キログラム／平方メートル、最大曳速二二四キロ。

曳航機は九七重II型を主用したが、百式輸送機(MC)や四式重でも曳航できた。

また日本国際航空工業では、18年2月から京都工場で、戦車搭載用の「ク」一七の試作を始め、8月に試験飛行を行った。翼面積一二平方メートル、搭載量8吨、全備重量13吨、翼荷重一一六キログラム／平方メートル、最大曳速三五〇キロという大きなもので、四式重で曳いた。

試験飛行の結果に基いて、II型の検討を始め、またこれと併行して、この機体に四五〇馬力のエンジン2基をつけたキー一〇五も試作した。翌19年の夏「ク」一七II型とキー一〇五の最終審査を行った結果、キー一〇五の方を採用することに決した。

キー一〇五は滑空機と輸送機の合の子のようなもので、離陸して高度をとるまでは曳航機の力を借り、その後は自力で飛行するというものであった。二式軽戦車を搭載することができ、世界的にみても卓越した輸送機だったが、航空機生産の重点から外れてしまい、終戦までに9機生産されただけだった。

大戦後現出し朝鮮戦争で活躍した米軍のC-119輸送機と、型状が似ており、搭載量も概ね同等であることは興味深いものがある。

五、滑空機搭乗部隊の創設
 第一挺進団は第一回目の南方出陣で、

火力が弱体なことを身をもって体験した。

例えば、バレンバン飛行場救援に現れた敵装甲車は、肉迫攻撃によって潰すことができたが、ともに立ち向えば勝てる相手ではなかった。またパレバン市に地上進攻したとき、ムシ河に敵装甲艇が現れたが、射つべき火砲がなかった。

物料投下については未開発の分野が多く、先にも述べた通り速射砲の投下が怪しかった。止むを得ず、十一年式平射歩兵砲のような旧式兵器をもらい受け、これならば機関銃の物料箱の収納できることを確認して、南方に持って行ったほどだった。

内地に帰って17年7月、挺進練習部に重火器班を作り、火砲の携行について、本腰を入れて研究を始めた。班長は林中尉で、その下に後に挺進機関砲隊長となった田村和雄中尉(54期)がいた。

重火器班は後に滑空機搭乗部隊に発展するが、初めは火砲の投下を主として研究した。

37ミリ速射砲、大隊砲、山砲等について研究し、速射砲、大隊砲は車輪を小さくする等の改修を施し投下可能になった。山砲については、やがて開発される滑空機を使うという結論を出し

後に第二挺進団がレイテに降下したときは、大隊砲と、その少し前に装備された曲射砲(小型迫撃砲)を重爆から投下して、オルモック北方の戦場で使った。

重火器班は翌年の5月まで新田原にいて、主として投下試験などを行っていた。18年6月初、第一挺進団に再度動員が下令された。このとき重火器隊を編成して動員編成に加った。隊長は高屋三郎大尉(50期)だった。

ガ島に敗れ戦局の焦点はニューギニアに移っていたときで、ベナベナ・ハーゲンの飛行場奪取の内示を受け、先ずペリリユーに前進したのであるが、少しでも火力装備を増加したいということで、研究部隊を連れて行ったのである。

第2回目の出動は、結局戦機に恵まれず、19年8月内地に帰還した。

重火器班が無くなってから、重火器投下については挺進練習部の研究部で引続いて研究を行ったが、各種火砲を分解して物料箱に収め、重爆で投下するという方式は容積上の制限が多く、効率が悪かった。そこで輸送機の扉口から投下することを研究した。それにしても投下可能なものは20耗自動砲、

37耗速射砲、大隊砲、曲射砲まで、山

砲、高射機関砲、47速射砲等は当時の輸送機では投下の見込みがなく、滑空機に譲らざるを得なかった。

余談になるが、当時各国空挺部隊はどこも同じレベルであって、米軍が榴やトラックを投下できるようにしたのは、戦後C-119輸送機が実用化されてからである。朝鮮戦争のときは、これらを投下している。

滑空班が18年9月1日に滑空飛行戦隊になったことはあとで述べるが、それと同時に、滑空機搭乗部隊として挺進練習部の隷下に次の諸隊が編成された。

挺進第五聯隊 (西筑波)

挺進戦車隊 (唐瀬原)

挺進工兵隊 (唐瀬隊)

挺進通信隊 (唐瀬原)

新編成部隊の要員は、一部落下傘部隊内から補充されたが、大部分は一般部隊から転属して来た。落下傘部隊要員の尉官以下は、今まで全部志願者を採用していたが、このときの転属者は志願制ではなかった。しかし、下士官兵は全部現役、将校も現役が多く精鋭だった。

落下傘部隊と違って、降下訓練を施す必要が無かったので直に戦力となった。これが滑空部隊の利点と見えよう。

新編成各部隊の内容について説明を加えれば、そのときまでに挺進聯隊は4個できていて、これは全部落下傘聯隊だが、第五聯隊は滑空聯隊だった。過渡的な編制で歩兵大隊1個と重火器大隊1個より成る。

歩兵大隊は一般師団の歩兵と同様だった。

重火器大隊は、山砲中隊、速射砲中隊(47耗)、機関砲中隊より成り、これらは将来師団となったとき独立すべきものを、一時まとめておいたという感じだった。

聯隊長は伊集院兼俊大佐(30期)、歩兵大隊長山本春一少佐(45期)、重火器大隊長納屋馨少佐(48期)後に高屋三郎少佐だった。

挺進戦車隊は、戦車中隊、自動車中隊各1と材料廠より成り、戦車中隊はまだ「ク」一七滑空機が実用化されていなかったが、将来を見越して作られたものだった。二式軽戦車を装備した。自動車中隊は師団軽重的性格のもので、「ク」一八滑空機に搭載可能な九六式小型自動車車を装備した。隊長は面高俊秀少佐(44期)だった。

挺進工兵隊は、2個中隊と器材小隊より成り、師団工兵に準ずる装備を持ち器材を運搬するため、前項の自動車中隊と同じ小型貨車を装備していた。

隊長は福本留一少佐(49期)だった。

挺進通信隊は、有線中隊と無線中隊より成り、師団通信に準ずる能力を持っていた。隊長は坂上久義大尉(卯期)だった。

以上各部隊は、訓練のできた人員をもって編成したので、間もなく実戦に役立つ部隊となったが、滑空飛行部隊の整備がこれに伴わないので、空中機動の訓練は一部の者が体験した程度だった。

19年4月、挺進練習部に対する特命検閲があり、当時第一挺進団は南方に出ていたが、第三、第四聯隊を挙げて唐瀬原で演習を行った。そのとき、第五聯隊の一部が「ク」一八三機に乗って参加した。

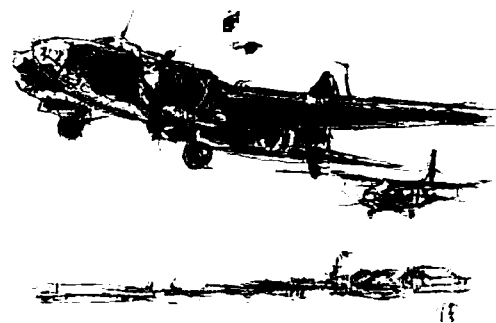
飛行場以外の場所に滑空機が着陸した演習は、終戦までこの一回だけだった。

六、滑空飛行部隊の創設と空輸作戦

滑空班の操縦者養成は着々と進み、18年9月には約50名の操縦者を擁するに至った。

9月1日、滑空班を復帰し新に滑空飛行戦隊を編成し、陸軍挺進練習部長の隷下で西筑波に位置し、操縦者の養成を続行した。

戦隊長は北浦尊福中佐(34期)、戦



97重 「ク」-8

隊付古林少佐、第一中隊長三嶋木大尉、第二中隊長佐藤二郎大尉、第三中隊長山口義輔大尉(三人共53期)飛行場中隊長清田利夫中尉(55期)だったが、初めは第一中隊だけで、操縦者の養成が進むにつれて第二、第三中隊が編成された。

戦隊の機種は97重II型と「ク」一八を基本の装備とし、中隊は97重9機、「ク」一八18機、それ以外に操縦教育に必要な練習機を何機か持っていた。

西筑波には、前項で述べた通り同時に編成された挺進第五聯隊がいたので、この部隊を乗せて飛行訓練を実施した。曳航離陸し北関東一円を飛行して切離

し、西筑波飛行場に着陸する訓練だった。他の飛行場や演習場に滑空機を着陸させると回収に困るので、殆んど実施したことはなかった。

19年4月、挺進練習部の特命検閲時の総合演習に、滑空機が加入したことは前項でも述べたが、落下傘部隊と滑空部隊を組合せた最初にして最後の演習だった。

西筑波を発った滑空部隊は、宮崎県唐瀬原の演習場内に着陸し、戦闘に参加したが、使用した「ク」一八は降下場の端まで引張って来て放置し、終戦後までそのままになっていた。降下場に隣接して唐瀬原飛行場があったが、不整地に着陸したので再使用に耐えなかったように記憶する。

なお飛行場内の着陸には車輪を使用するので、何回でも使用できた。

この特命検閲より少し前だったと記憶するが、西筑波飛行場上空で、切放し操作の誤で「ク」一八が墜落し、搭乗者全員が殉職した。そのときは操縦訓練だったので、乗っていたのは飛行部隊の者だけだった。

19年に入って、戦局は悪化の一途を辿った。6月敵がサイパンに上陸、絶対防衛圏の一角が崩れ、やがてグアムが奪われペリリューが陥ち、10月にはレイテ決戦となるが、敵潜水艦の跳梁

によって、南方に対する輸送は極度に逼迫していった。

緊急物資の輸送に少しでも役立てようと、19年6月、新に輸送飛行第14中隊と第15中隊を編成し、第8輸送飛行隊として編合、これを航空総軍の隷下に入れた。

「画」中隊は97重9機と「ク」一八滑空機より成り、滑空飛行戦隊が編成を担当した。戦隊では三嶋木大尉以下優秀な操縦者を尽くこれに差出した。

第14中隊長三嶋木大尉、第15中隊長青柳民雄中尉(54期)だった。

「画」中隊は立川を根拠として南方に対する空輸を開始したが、20年に入ってから、立川は空襲が激しいので平戸に移った。

空輸先は主にマニラだったが上海、南京にも行った。空輸物資は、通信機、航空機部品、兵器部品、衛生材料等であつたらしい。一機で一機を曳いて、通常3機が一群となって飛行した。

当事者の記憶によれば、5月から10月まで連続実施したというが、5月からというのと輸送飛行中隊になる前から実施していたことになる。延何機行ったのか記録がないが、多い者は15回行ったと述懐しているので、延機数は一〇〇機以上になったと思う。

立川―新田原―小祿―台湾(嘉義が

屏東)を経由して目的地に飛んだ。14中隊は無事故、15中隊は台湾で曳航ワイヤーが外れ、阿里山麓に「ク」一八が不時着するという事故があった。

「ク」一八は先方に残り、97重に滑空操縦者を載せて帰ったが、帰路は戦地からの便乗者で一杯になった。

挺進練習部では、滑空機搭乗部隊のうちで西筑波の挺進第5聯隊だけは、滑空機に乗る訓練ができたが、唐瀬原にいる部隊はその機会に恵まれなかった。南方空輸を利用し幹部の体験飛行を企図した。

挺進戦車隊や挺進工兵隊の将校が、空輸品率領の名目で上海あたりまで行った記憶がある。輸送飛行中隊は指揮系統を異にするので、乗ったとすれば、滑空飛行戦隊からも空輸機を出していたのかも知れない。

台湾沖航空戦が始つたのは、10月12日であるが、この頃はマニラに夕方着陸して、「ク」一八と重爆に載せた荷物を引渡し、翌早朝離陸して帰った。しかし、それも11月に入るとできなくなり、滑空機による空輸作戦は打ち切られた。

マニラに残した「ク」一八は、偽飛行機として敵火を吸収するために活用されたという。

19年11月、第一挺進集団が編成されたが、このとき滑空飛行戦隊は、滑空飛行第一戦隊と名称が変り、作戦部隊として第一挺進飛行団の隷下に入った。このとき古林中佐が戦隊長となり、中隊長は、伊藤四郎大尉(53期)のほか、前述の山口大尉でもう一個中隊は未充足だった。伊藤大尉は南方へ空輸に出て行方不明となり(20年6月戦死認定)、その後任は佐藤大尉だった。

19年12月、挺進集団の南方出陣にあたり滑空戦隊の一部が雲竜に乗って比島に向ったが、海没戦死してしまつた。



南方へ軍需品空輸

義烈空挺隊の起用が決るまでの経緯

—井戸田メモから—

田中 賢一

場の存在

ある。

ることにした。

沖繩作戦が始まった頃の義烈空挺隊
 硫黄島中継が不可能の為、20年1月
 30日サイパン特攻作戦は取りやめとな
 り、第3独立飛行隊はそのまま浜松に
 とどまったが、奥山隊は古果の宮崎県
 の唐瀬原基地に帰った。挺進第1聯隊
 第4中隊は奥山隊が去った後新に出来
 ていたので、聯隊に戻ることはできな
 い。前年10月第2挺進団がフィリピン
 に出でいたので、第3聯隊が使って
 いたあき兵舎に入った。指揮系統は第
 6航空軍直轄のままだったが、第1挺
 進団では温く迎え、管理支援等は一切
 担当し人間や浜松における同様特攻
 隊として処遇した。

奥山は激しい訓練をもって士気の維
 持をはかった。沖繩に向ったとき不時
 着して生き残った者の述懐によれば、
 特攻隊になっており目標もないまま空
 しく日を送るのは苦痛だった、外出し
 て同聯隊の者に会うのが嫌だったとい
 う。そのうちに硫黄島に上陸した敵に
 鉄槌を下すのに使われるという内示を
 受けたが、これも立消えとなった。雌
 伏三ヶ月半、沖繩特攻が決定したので

個師団と一混成旅団で島を守るには、
 この両飛行場を主陣地の中に取り込む
 ことはできぬと、飛行場には警戒部隊
 を配置しただけだった。それがため、
 4月1日上陸の当日両飛行場を敵手に
 委ねることになった。これは航空部隊
 にとつては致命的なものだった。勿論
 我が軍は撤退にあたり滑走路を破壊し
 たが、4日には戦闘機が使用を開始し
 た。32軍では主陣地から長射程砲で夜
 間飛行場を射撃し、6航空軍では6日と
 12日に、爆撃機数機で夜間爆撃したが、
 成果は確認できない。4月12日までに
 陸海軍合せて約700機にも及ぶ特攻機を
 繰出しているが、さほどの成果を挙げ
 ていない。それは我が機の接近をレー
 ダで察知し、地上待機の戦闘機をもつ
 て要撃する為ということは疑いない。
 何としても敵飛行場を制圧しておい
 て特攻攻撃をかねねならぬ。そこで
 思いついたのは、戦闘機をもって敵の
 要撃機を押しつけて進入し、飛行場に
 ある敵機を銃撃するという案である。
 挺身戦闘機隊を編成し殴り込みをかけ

陸海軍から選抜した二〇機の戦闘機
 隊は、19日薄暮、両飛行場に対地攻撃
 を実施し、わが地上軍からの通報によ
 れば、大爆発を生じさせたという。夜
 に入つて、重爆による爆撃も実施した。
 そして、その晩から翌日にかけて、陸
 軍は約五〇機、海軍は約一〇〇機の特
 攻機を突入させ、多大の戦果が報告さ
 れた。菊水三号と称するこの日の攻撃
 は、当時わが軍が判断したほどの、物
 的戦果はなかったにしても、敵を恐怖
 のどん底に陥れたことは事実だった。
 これは戦後承知したことであるが、
 米海軍の戦史によれば、駆逐艦ラフェ
 イ号は、16日の朝八〇分間に二二回の
 攻撃を受け、六機の特攻機と、四発の
 爆弾が命中。
 それは如何なる船といえども、
 いまだかつて経験したことのない、全
 く生還を期し難い猛烈な攻撃だった。
 —と述べている。
 この頃、米海軍の従軍記者の報告に
 よれば、
 —敵機の攻撃は、昼も夜も絶えな
 ことがない。慶良間の錨地は、損傷艦
 で埋めつくされ、太平洋に至る所、跛を
 曳く艦船の列が、東へ東へと進むのが
 見られた——
 また、別の記者の報告によれば、



—悪天候が時々々の休息を与えてく
 れる以外は、特攻機が連日連夜襲つて
 くるために、休む暇はない。眠るといっ
 ても、夢まぼろしの間に身体を横たえ
 ているだけである。警報が拡声機で伝
 えられると、水兵共は糊癩を起し、
 モウ止めてくれと叫び、全員がヒステ
 リー症状だった——
 米海軍の司令長官スプルーアンズ大将
 は、十日、太平洋戦域総指揮官のニミツ
 ツ元帥宛、次のように要請している。
 —日本軍特攻機による攻撃は、猛
 威をふるっている。これによるわが方
 の損失は大きく、これ以上損害が増大
 しないように、あらゆる手段を講ずる
 必要がある。よって太平洋艦隊は、そ
 の使用しうる一切の飛行機を動員し、



井戸田参謀

九州と台湾の敵飛行場を攻撃されたい。6航軍では、戦果の詳細はよくわからぬものの、確かに手筈ありとみた。先ず飛行場を叩いたことが、効果を生んだものと判断した。飛行場制圧に向った挺進戦闘機隊は、陸軍一機のうち八機、海軍一〇機のうち二機がそれぞれ未帰還となった。

義烈空挺隊の起用

目前の戦闘指導に気をとられ、6航軍では指揮下に義烈空挺隊のあることを忘れていたようだった。そこへ挺進戦闘機隊の成果が現れると、同じ目的で義烈空挺隊を使うことを思い立った。しかし、この部隊の使用には大本営の認可を要すと、かねてから示されていた。そこで菅原軍司令官は高級参謀の井戸田勇大佐を派遣し、義烈空挺隊を使い北、中両飛行場を制圧する意見を

具申した。それが何日なのか記録がないが、後で述べる井戸田メモによれば15日頃だと思う。井戸田大佐は大本営作戦部長宮崎中将に説いたが同意を得られない。「近日中に現地に向くので、そのときに検討しよう」という答を得て引下らざるを得なかった。

特攻機は連日飛び立つがその戦果は確認できない。敵無線の傍受によると目標上空に到達する以前に撃墜されるのが大半であるらしい。敵要撃機の待ち構えている両飛行場の制圧は、いよいよ急を要するとし、6航軍は大本営に矢のような催促をした。大本営もその熱意に負けたのか、5月2日に義号作戦の準備を命じた。6航軍では翌3日奥山を福岡の軍司令部に招致して、このことを伝えたが、部隊としては今更準備することは何もない。

井戸田参謀は再度上京して認可を求めたが、容れられなかった。大本営の目が、沖繩から離れ本土決戦に向いていたのである。三百万の大軍を動員し、本土決戦の配置につけつつあるが、練度が著しく落ちてきていることは覆うべくもない。

徴兵年齢を一年繰り上げ、しかも体格が悪くても不具者でない限り全部徴集している。未教育の補充兵も招集した。これら入営者を教育するにも、適

任の教官、助教が底をついている。配属につけ築城をやらせなければならぬので、教育に専念することもできない。頭数だけは三百万の大軍でも、果して戦闘に堪えられるかどうか、頼りにならない部隊が多い。奥山隊僅か一三六名でも、皆粒選りである。世界的レベルにおいて最精鋭と言えよう。

大本営では、今ここで奥山隊を失うのは惜しいと思った。最後の取っおきの部隊にしたかったのである。大本営では、奥山隊だけでなく、その母隊である第一挺進団についても、同様の考えを抱いており、唐瀬原基地にいて南九州の本土決戦に、全員が巻き込まれることを恐れ、一個聯隊を関東地方に分置したほどである。ところが、第6航空軍では、奥山隊が精鋭なるが故に、これに多大の期待を持ち、これを使おうとしたのである。沖繩作戦にまだ勝機ありと信じていた。が、その勝機は、日一日と薄れてゆくことを憂慮し焦った。軍司令部内で特にこの考えが強かったのは井戸田高級参謀である。

井戸田が戦後になって書いたと思われるメモがある。このメモは、文章として整っていないが、そのまま引用してみよう。

……沖繩作戦でこのとき勝機があった。

大本営陸軍部のスローモーション作戦のため、好機を逸した。

上陸して地歩を占めるまで、敵は苦戦、退却敗退の電報頻りにあり、この機に乗じて、義烈空挺隊を投入すれば、敵を撃退できると信じた。

航空軍は、大本営に意見具申するに決し、井戸田の上京となる。

河辺参謀次官と宮崎第一部長が実情視察に福岡に來り、帰京後数日にして(軍の意見具申後十数日経過し)義烈空挺隊を発進させたが、時既に遅く、敵は確呼たる地歩を占め、折角の決死隊も成功するに至らなかった。

また別のメモには次のようなことも書いてある。

第六航空軍の義号意見具申。

大本営にその意志なし。

このときが勝機であった。

特に第六航空軍は沖繩で勝負。

大本営は沖繩戦打切り、本土決戦。

第六航空軍は沖繩で敗ればソ連

参戦と判断。

大本営はソ連絶対に参戦せずと判断。

井戸田メモは断片的なものであるが、6航軍の考えを、十分にうかがい知ることが出来る。第三十二軍の攻勢が失敗に終わった後も、6航軍は一回、5航艦は三回総攻撃を実施し、そのつど北中両飛行場の攻撃にも兵力を割いているが、成果の程は明らかでない。

井戸田メモにもある通り、十七日に参謀本部から宮崎第一部長が福岡に来た。第六航空軍では、手ぐすね引いて待ちうけ、義号作戦実施を強く説いた。そのとき、奥山隊は既に熊本の健軍飛行場に移り、待機している。また第三独立飛行隊は、明日、浜松から健軍に移動することになっていた。6航軍としては、もはや引くに引かれぬ勢だった。

菅原軍司令官は、——特攻隊に指定されて既に半歳、計画しては取り止めになること再三に及ぶは、その心情忍び難い、と統率上から決断を求めた。それでも、宮崎部長は諾否を明らかにせず福岡を去った。

軍司令部では、梅津参謀総長が不同意なのであろうと取沙汰し、翌18日、阿南陸軍大臣が来訪することになっていたので、軍司令官から陸軍大臣を説こうとしていたところ、その前に

——義号作戦認可せらる

の電報が入った。これでいよいよ本まじりになった。

かくして23日決行ときまったが、天候不良で24日夕刻発進した。

井戸田さんのこと

パレンバン空挺作戦のとき挺進団長久米大佐は、通信係の上田大尉、副官の稲垣大尉、斉藤通訳、荒木カメラマンを従えて、口式輸送機に搭乗しパレンバン飛行場の近くに強行着陸することになった。初めの計画では高級部員の木下中佐と私が聯隊と一緒に降下することになっていたが、団長の命令で私共は発進基地で勤務し、団長以下この顔振れの人達が強行着陸することになった。カハン飛行場で見送ったとき、一人の中佐参謀が強行着陸機に乗り込んだ。一緒に見送っていた木下中佐に尋ねると、あれは16軍の井戸田参謀だ」と答えた。パレンバンに降下して提携するのは16軍隷下部隊だが、ジャワ攻略の16軍にとって支作戦ともい

べきスマトラに、何故航空参謀が行くのか私にはよく分らなかつた。私と井戸田さんの御縁といえは、このときチラッと見ただけである。

それが戦後三二年もたった昭和51年に井戸田末亡人から意外の依頼を受けた。井戸田は小牧市の市議員をや

めて暇になってから、軍人時代の体験談を書いていたが、昨年2月17日突然他界してしまった。これが書き残したもののだが、貴方が一冊の本に纏めてもらえないか」という話だった。これには間に立った先輩もいるので、むげに断る訳にもいかず、持帰って目を通してみた。

原稿はパレンバン・ジャワ作戦と題するもので、内容は私にとってそれほど目新しいことではないが、挺進第一聯隊が海難に遭い編成早々の第2聯隊を使うことについて、南方軍司令部内では危ぶむ声が強かつた。これに対し



強行着陸した団長機

挺進団長久米大佐と16軍航空参謀井戸田中佐が十分に自信ありと説いて決定にこぎつけたというところが、真に迫って述べている。当時私は海難にあった第一聯隊の装備品取得に走り廻っていたので、このような内情は知らなかつた。何故このように井戸田中佐が挺進団運用のことに拘ったかというところ、これは私は戦後知ったことだが、軍事研究の為欧州に滞在し、ドイツの西方に対する電撃作戦を目のあたりに見て、15年10月帰国した井戸田中佐は、東條陸軍大臣に落下傘部隊の創設を具申した。それによって12月には浜松陸軍飛行学校練習部創設の訓令が出されたのである。このような人の遺稿とあらば井戸田夫人の依頼を引受けざるを得ないと思うに至った。

第16軍参謀としてジャワ作戦までのことは、若干の修文はしたもの、殆んど原稿通りで本にすることにしたが、広告の裏紙に第6航空軍高級参謀として、沖繩作戦に携ったときの所見のようなものが断片的に書いてある。これが完全原稿であればと思つたが致し方ない。捨てるのも惜しいので、若干の解説をつけて、付録として巻末に掲げた。その中で義号作戦に関係あるものを、井戸田メモとして前の論文に入れておいた。

忘れ難い人たち

陸軍空挺①

挺進第三聯隊長

田中 賢一

白井恒春中佐

レイテ空挺作戦は背梁山脈以東の平地に向う攻勢の初動を掴む為、ブラウエン地区三つの飛行場を目標に行われた。これ以外にもレイテ湾沿いの二つの飛行場にも、敵空軍の活動を一時的に封ずる為、一部兵力を降下させるのであるが、そのことは別の人物を標題にしたときに述べる。

19年12月6日夕刻、白井聯隊長は、第4中隊を直接率いてブラウエン北飛行場に降下した。同時刻にブラウエン南飛行場には、桂大尉の第2中隊が、サンパブロ飛行場には、第4聯隊砲田大尉の中隊が降下することになっていった。

白井聯隊長の降下後の行動については、当人の手記が現存しているため、それによって顧みることにする。ブラウエン降下作戦は、その翌日背後イビルに一ヶ師団もの敵が上陸してくるの、第一回の降下だけで打切られてしまふ。白井聯隊長は僅かな部下を率い、五十日近くもかかって、第35軍司令官

鈴木宗作中将のいるカンキポットに辿りつき、報告することができたが、それから九日後の2月4日陣没してしまつた。ブラウエン降下作戦は打切られたが、オルモックの急を救うため、挺進第4聯隊の主力がバレンシヤに降下し、オルモック北方で戦い、カンキポットに転進した。レイテに降下した第3聯隊には戦後一名の生還者もないが、白井聯隊長の手記は4聯隊の副官によって持ち帰られ、後世に伝えることができた。以下カコミの文面がその手記である。

昭和十九年十二月六日一八五〇頃 跳下(ブラウエン) 北飛行場末端附近と判断せらるる

二二〇〇部隊長の下に集結せるも 聯隊長以下六名、二三〇〇本部の一部集結す。此の間之等兵力を以て滑走路上観測機約十機を発見 爆碎焼却し全機を破壊すると共に 幕舎、弾薬集積所位置等を焼却し、 第二次挺進部隊に飛行場標示の為 所在ガソリン缶を天明まで引続き 焼却す。

跳下とは落下傘降下のこと、当時の教範用語。後半夜第二次挺進部隊が降下することになっていた。輸送機の損害甚大だったが、七機はルソン島リバ

を離陸した。しかし天候悪化してレイテ島に進入できなかった。

約六十名集結するや滑走路北側、森林内の飛行機格納掩体等を利用して、陣地を占領し黎明迄に工事を命ずると共に目標となるべき樹木に国旗を掲揚し占領確保を明示せり。此間垣兵団の斬込隊も、重松大隊の斬込隊と共に不明なり。天明と共に南方並に西方に銃声しきりなり。

〇八三〇頃戦車(MG)二、MG五を有する敵約三五〇名迫撃砲支援の下、南方及東方より逐次包囲態勢をとりつ、攻撃し来り、東方より集結兵力を以て反撃せるも、銃砲火の集中により遂に北方密林内に集結す其の兵力約三十名なり。其後日没迄飛行場北方約一〇〇〇米密林内に遮蔽す。

一八〇〇飛行場夜襲により奪還を企図し南進せるも飛行場北側と判断せられる方向より射撃を受けしを以て西方より迂回せんとせしに深さ腰を没する湿地帯に陥り行動不能なり進路を南方にとり前進中。八日〇五三〇南飛行場滑走路西端に達す。天明の近迫と現在位置との関係に鑑み、天明迄に「ダコタ

ン」河南側に潜入し、垣、泉両兵団の攻撃進捗を待つべく決意し南進中、「ブラウエン」ー「ドラッグ」道上に約二十輛の自動車並に一部敵操縦手を発見之を全車破壊撃滅し、道路上を南下せしが敵幕舎左右に林立し、黎明となり敵兵二、三名幕舎前に我等を見るも傍観せるを以て、前進を開始し河岸に至るに敵監視兵二名の誰何を受くるに会い、之等を刺殺すると共に天明の初期「ダコタン」河を渡河し、潜伏前進し敵作戦道路(自動車)側方約五十米敵砲兵陣地一、迫撃砲陣地二の後方に潜伏し飛行場方向の戦況の進展を待機観察するに決す。

垣兵団とは第1師団、泉兵団は第26師団。

ブラウエン北飛行場には聯隊本部と逢田大尉の第4中隊が降下し、うち何機かは敵の対空火器で撃墜されたが、聯隊長が掌握できた人員はこのように少ない。聯隊付の土屋少佐以下は、どういふ訳か聯隊長と行会わず、その晩北方から突入した第16師団の斬込み隊と合流してしまつた。

聯隊長が南に移動したのは、南飛行場に降下することになっていた第2中

隊を掌握しようと考えた為であろう。戦後調べた米軍の資料では、南飛行場には一兵も降下していない。目標を誤りサンパブロに降下したらしい。この飛行場を占領したが、最後は玉砕した。

八日終日「ダコタン」河を攻撃する敵兵力三百迫撃砲四門射撃猛烈を極む。時に一四〇〇(以下七字不明)飛行場に対する我が攻撃の進展せしを觀察し更に状況の進展を待機するに決し、日没と共に位置を移動し軒々十日迄現在地附近にありしも十日後遂に泉兵団と合致し後図を策する目的を以て西進を開始す。

途中敵の攻撃を受け逐次戦力を消耗し、十八日重松大隊と「マタグワ」東北方四軒附近ジャンケル中に遭遇せし時の兵力聯隊長以下十二名となる。其後重松大隊と共に行動し、二十二日二八七高地に於て野中大隊と合致す。時に先行せる通信下士官外一名と追及者六名増加せるも、副官以下六名二十五日第十六師団との連絡のため派遣せるも遂に一名脱出帰還せるのみ。爾後野中大隊と行動を共にし二十一日夜二八七高地発十二月三十一日〇〇に進出、一月十九日「リモ

ン」南方地区にて本道突破、一月二十五日星兵団着、二十六日尚軍司令部に到着せり。

二、土屋少佐の指揮する兵力十六名の行動

跳下と共に敵飛行場内飛行機幕舎ドラム缶、弾薬置場を焼却し、破壊を続行し七日天明後北飛行場北方地区に位置しありしが100歩兵第二十聯隊斬込隊約二〇〇名と連絡なり、爾後其の指揮下に入り、挺進部隊は主として飛行機、ドラム缶に、目標を指向し、七日夜八日夜九日夜と斬込を継続し、敵飛行機諸資材施設を破壊焼却を続けたる後、十日垣兵団命令に依り西方高地方向に転進す。爾後跳下者逐次垣兵団に集結し、土気旺盛一月二日七十三名の兵力に達す。

三、南飛行場攻撃隊桂大尉の指揮する七十名の跳下地点並に戦果不明

四、サンパブロ飛行場跳下部隊挺四繩田大尉以下二十四名の行動並に戦果不明

五、綜合戦果(ブラウエン南北飛行場、サンパブロ飛行場)

以下各部隊の残存集結者の戦果を綜合すれば左の如し。但し本戦果

は残存者八十一名の戦果に過ぎず、爾余の約三〇〇名は戦闘行動並に生死不明にして戦果を確認し得ず。

戦果表

1. 飛行機	P38 戦闘機 グラス輸送機 観測機	41機 24機 6機 27機
2. 戦自乗兵高全幕遺其被	車車車車銃薬舎体料件 貨用弾機彈死空物 動器機機乘航物 自乘兵高全幕遺其被	42輛 5輛 3門 55 100~150 多 多 多

尚は第35軍、星は68旅団

白井中佐と私の関係

この聯隊に動員が下令されたとき、

私は陸軍挺進練習部付で、各聯隊から出てきた下士官候補者の教育を担当していたが、動員によって下士候補隊は即刻解散となった。聯隊との繋がりは、こんなところにもあったが、それにもまして白井さんとは、高鍋町における借家が隣という御縁があった。

毎朝「オイ出かけるか」と声をかけられ、連れ立ってバス停に向った。バスは通動用の部隊のバスだった。

聯隊に続いて動員下令となる第二挺進団司令部の、私は部員に予定されて

いたが、挺進戦車隊長に補職され、フィリピンには行かなかった。そのようなことがあったので、戦後二回ばかりレイテに行き「レイテ作戦の記録」という本を原書房から出した。その一節を左に紹介する。

昭和十九年十月二十四日、宮崎県の唐瀬原にある陸軍挺進練習部に、動員下令の電報が入った。その日は、レイテに敵が上陸して四日後にあたる。

動員下令は、動員計画書に定めた符号をもって示される。そのとき入電した符号に該当する部隊は、第二挺進団であって、その内訳は、第二挺進団司令部、挺進第三聯隊、挺進第四聯隊及び挺進飛行第一戦隊だった。後に高千穂部隊と呼ばれ、レイテに降下した落下傘部隊がこれである。

挺進聯隊や挺進飛行戦隊は、挺進練習部の隷下部隊として実在するが、挺進団司令部は、挺進練習部所属の人員でその都度編成されることになっていた。但し、全く白紙の状態から人選をするのではなく、戦時命課と称し、おむね内定はしていた。

私は、当時挺進練習部の教育で、動員が下令された場合、挺進団司令部の部員に内定していることは承知していた。挺進第三聯隊は、翌二十五日動員完結、直ちに佐世保に行って航空母艦に

搭乗し、フィリピン方面に向うことになった。

私は、また団司令部部員の発令は受けていなかったが、挺進団長に予定されている徳永大佐の命を受け、聯隊の乗艦について打ち合わせるため、佐世保に先行した。

佐世保に着いたのは二十五日朝だったと思う。佐世保重砲兵聯隊に行き、翌日到着する聯隊のため宿舎を確保し、次いで海軍の鎮守府に行った。そこで誰と打ち合せたか記憶はないが、案内されて埠頭に出た。「準鷹(じゅんよう)」という空母が横付けされていた。

空母といえば艦載機があるものと思いい、艦内に入ってみると、飛行甲板や格納庫には、飛行場で使用する特殊自動車類と爆弾が満載されており、飛行機は一機もなかった。正体は高速輸送船である。

人員の乗るところはどこかと尋ねると、

——自動車の横でも、爆弾の間でも、あいてる処に乗って下さい。木や布のような可燃物は持捨て、ベンキも剥きましたので、火災の心配はありません。住心地はよくありませんがどうぞ。

という返事だった。

聯隊が到着して、一晩か二晩市内に

宿泊した。

乗艦の前夜、聯隊長の宿舎に当てられていた旅館の一室で、聯隊長、副官、聯隊付少佐、五人の中隊長、それに私に加わって一献くみ交した。灯火管制の暗幕で閉まれ、薄暗い部屋だった。

聯隊長白井少佐は飄逸な人で、酔いが廻るにつれていつものように、小皿を箸で叩きながら、節廻し面白く歌った。私には十期も先輩になるが、高鍋町における借家が隣のため、家庭的にも昵懇に願っていた。聯隊付の土屋少佐、副官河野大尉、中隊長の松下、桂、大城、蓮田、久富の各大尉は、私にとっ

ては、一期か二期先輩または後輩にあり、日頃からよき飲み友達だった。その夜の宴は、特に気負うこともなく、日本における最後の一夜を、心地よく酔って散会した。

私は、団司令部員として、旬日後

飛行機で先発し、多分マニラでこの人達を迎えることになると、そのときは思っていた。ところが、佐世保で数

日間過し唐瀬原基地に帰ってみると、私の就くべき席には、一期先輩の稲本少佐が発令されていた。田中は前回も部員として戦場に出ているからという理由で、稲本少佐の強い希望が叶えられたと聞く。稲本少佐は、これから二

か月後、フアトンで戦死する。

佐世保で一献くみ交した人

- 聯隊長 白井恒春中佐 42期
- 聯隊付 土屋 茂少佐 50期
- 副官 河野 大尉 特志
- 第一中隊長 松下兼道大尉 54期
- 第二中隊長 桂 善彦大尉 54期
- 第三中隊長 大城 隆大尉 54期
- 第四中隊長 蓮田正之大尉 54期
- 重火器中隊長 久富 薫大尉 准52期
- 大城大尉だけルソン島に残り生還



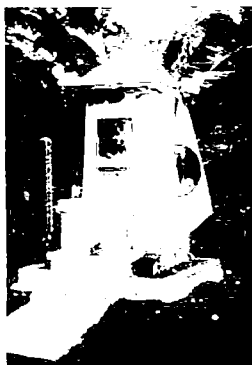
白井中佐南サンフェルナンドにて



搭乗前聯隊長と副官



ブラウエン飛行場(米軍の写真)



ブラウエン慰霊碑



弾痕の残る椰子(50年頃)

隨筆

正氣の歌に拾う
特攻隊員の正氣

田中賢一

正氣とは天地の間にみなぎると信じられていた正大の氣とでもいふべきか。宋の文天祥はそれを詠い上げた。

正氣の歌 (宋) 文天祥

①天地 正氣有り

雑然として 流形に賦す

②下れば則ち 河嶽と為り

上れば則ち 日星と為る

人に於ては 浩然と曰い

沛呼として 蒼冥に塞つ

皇路 清夷に當れば

和を含んで 明廷に吐く

③時窮して 節乃ち見はれ

一一 丹青を垂る

齊に在りては 太子の簡

晋に在りては 董狐の筆

秦に在りては 張良の椎

漢に在りては 蘇武の節

敵將軍の頭と為り

樞侍中の血と為る

張睢陽の齒と為り

顔常山の舌と為る

或いは 遼東の帽と為り

清操 氷雪よりも勵し
或いは 出師の表と為り
鬼神 壮烈に泣く

或いは 江を渡る楫と為り

慷慨 胡羯を呑む

或いは 賊を撃つ笏と為り

逆豎頭 破裂す

④是の氣の磅礴する所 凛烈として 万古に存す

⑤其の日月を貫くに當りては 生死 安んぞ論ずるに足らん

⑥地維 頼りて以て立ち

天柱 頼りて以て尊し

三綱 実を命を係け

道義 之が根と為る

⑦嗟 予 陽九に遭い

隸や 実用力めず

楚囚 其の冠を纓び

伝車 窮北に送らる

鼎鑊 甘きこと飴の如きも

之を求めて 得べからず

陰房 鬼火蘭に

春院 天黒を聞さる

牛驥 一盲を同にし

鶏棲に 鳳凰食らう

一朝霧露を蒙らば

溝中の瘠と作るを分とす

此くのごときと 再暑寒

百沴 自ら辟易す

嗟哉 沮洳の場

我が安楽の国と為る

豈に 他の繆巧有らんや

陰陽も 賊する能はず

⑧此を顧れば 耿耿として在り

仰ぎ視れば 浮雲白し

悠悠たり 我が心の悲しみ

蒼天 悶ぞ極り有らんや

哲人 日に已に遠く

典刑 夙昔に在り 規矩は今に伝っている

⑨風簷 書展べて読めば 顔色を照らす

古道 顔色を照らす

然として流形に賦す」と言っている。即ち宇宙に正氣というものがあがり、それはとりとめがなく、もやもやしたものであると云う。しかし③以下にある如く国家非常の秋に現れるのだと言ひ、齊の太史の記録、晋の董狐の筆録（共に逆臣の事実を明らかにした）、秦王を討たうと張良が投げた鉄椎、漢の時代匈奴に捕らえられ十九年間節を屈しなかつた蘇武、以下史上に見る多くの人士を挙げ、これらが正氣の具現だと言っている。

我が特攻の烈士は文天祥の挙げた人々に優ると劣ることは微塵もない。であるから特攻烈士こそ正氣の現れの最たるものといふべきである。

②「下れば則ち河嶽となり／上れば則ち日星となる」正氣とは正にこのようなものであると詠っているが、特攻烈士の周辺に湧き上がる正氣は、天地を貫ぬくものといふべきである。

④「是の氣の磅礴する所／凛烈として万古に存す」（この正氣がひとたび満ち溢れては、厳然として万古に存する）特攻烈士の発する正氣は永遠に後世に存在するべきものである。

⑤「其の日月を貫くに當りては／生死安んぞ論ずるに足らん」（正氣は日月を貫くものであるから、人の生死など問題ではない）特攻烈士の正氣は日月を貫き、生死安んぞ論ずる

文天祥は南宋末の政治家で文士、二才のとき第一位で進士に合格。元が南下し宋は窮地に立つ。そのとき右丞相兼樞密使として敵陣に赴いて談判に當つたが捕らえられる。のち脱走して兵を募つて戦うが、四十三才のとき元に捕らえられ燕京（今の北京）に送られ、降伏を拒否して殺される。正氣の歌は燕京の獄中で作つたもの。

宋はその三年前に亡びるのであるが、救国の念に燃えて立ち上がったことが、先ず特攻隊員に相通するものと思ふ。正氣の歌全文解説すると多くの紙面を費すので、私が特に特攻隊員の精神と相通すると感じた個所だけを抽出して、若干の解説を試みたい。

①先ず詠い出して「天地正氣有り／雑

に足らん”である。

⑥「地維頼りて以て立ち／天柱頼りて以て尊し」(大地を維持する綱は正氣によって保たれ、天を支える柱は正氣によって尊厳である) 特攻烈士の発する正氣は天地、即ち我が民族を支えている。

⑦以下は文天祥が元に捕らえられ獄舎に在る間の不屈の精神(正氣)を吐露したもので、特攻隊員と環境を異にするが、⑧「此れを顧みれば耿耿として在り／仰ぎ視れば浮雲白し」(我が身を顧みれば耿耿としたもの即ち正氣が満ち溢れており、仰ぎ見れば悠々として浮かぶ白雲のようなもの) 特攻隊員の待機中の心境もこのようなものであろうか。

⑧「風簷書展べて読めば／古道顔色を照らす」(風吹きさらす縁側で書物を広げ読んでいると、昔の哲人の言ったことが私の顔を明るく照らしてくれる) この詩の結びの句は、古来名言として称えられているが、「書」を特攻隊員の遺書、遺詠、遺墨とおき換えてみたらどうか。我々は白らがそれを読むだけではなく、世の人に読ませねばならぬ。

文天祥の正氣の歌は、我が国の人士にも多く共鳴者を生み、同題の詩がいくつかが作られたが、その二つを挙げて、同じように特攻隊員の正氣を偲んでみたい。

文天祥正氣の歌に和す

藤田 東湖

①天地正大の氣

粹然として 神州に鍾まる

②秀でては 不二の獄と為り

巍巍として 千秋に聳ゆ

注いでは 大瀛の水と為り

洋洋として 八州を環る

③発しては 萬葉の桜と為り

象芳 與に 儔い難し

④凝っては 百鍊の鉄と為り

銳利 鋒を断つ可し

蓋臣 皆 熊熊

武夫 盡く 好仇

神州 孰か君臨す

萬古 天皇を仰ぐ

皇風 六合に治く

明德 太陽に伴し

⑤世として 汗隆無くんばあらず

正氣 時に光を放つ

⑥乃ち大連の議に参じては 大連物部臣

侃侃 瞿曇を排す

乃ち明主の断を助けては 伽藍を焚く

敬敬 中郎 嘗て之を用い 中郎 中臣 謙足

宗社 磐石安し 宗社 磐石安し

清丸 嘗て之を用い 清丸 和氣 清賢

妖僧 肝膽寒し 妖僧 肝膽寒し

忽ち龍の口の剣を揮い

噴使頭足 分かる

忽ち西海の颯を起し

怒濤 妖氛 殲す

志賀 月明の夜

陽りて 鳳輦の巡ると為す 藤原師賢

芳野 戦い 酣なる日

又 帝子の屯に代る 村上義光

或は 鎌倉の窟に投じ

憂憤 正に憤憤

或は 桜井の驛に伴い

遺訓 何ぞ慙慙なる

或は 天目山に殉じ 小宮山友晴

幽因 君を忘れず

或は 伏見の城を守り 鳥居元忠

一身 萬軍に當る

承平 二百歳

斯の氣 常に伸ぶるを獲たり

然れども其の爵屈するに当りては

四十七人を 生ず

⑦乃ち知る 人亡ぶと雖も

英靈 未だ皆て涙びず

長へに 大地の間に在りて

隱然 舞倫を殺つるを

孰か 能く之を扶持す

卓立す 東海の濱

忠誠 皇室を尊び

孝敬 天神に事う

文を修むると 武を奮うと 誓って 胡塵を清めんと欲す

一朝 天歩 翫み

邦君 身 先ず淪む

頑鈍 機を知らず

罪戾 孤臣に及ぶ

孤臣 葛藟に困しむ 葛藟 葛藟 葛藟 葛藟

君冤 誰に向かつてか陳べん

孤子 墳墓に遠ざかる

何を以ってか 先親に謝せん

荏苒 二周星

唯 斯の氣の随ふ有り

嗟 予 萬死すと雖も

豈 汝と離れるに忍びんや 汝 正氣

屈伸 天地に付す

生死 復た奚ぞ疑はん

生きては当に君冤を雪ぐべく

復 綱維を張るを見ん

死しては 忠義の鬼と為り

極天 皇基を護らん

この詩は主君齊昭が井伊大老の幕府によって閉門を命ぜられ、腹臣の東湖も禁固に処せられたが、そのとき作られたものである。干戈を交えて捕らえられた訳ではないが、作詩のときの境遇が文天祥と相通するものがあるので、これに和すと題したのであろう。
東湖の詩が後の人に愛誦されるのは、その誠い出しが素晴らしいからである。我々にとつては、特攻隊員を偲ぶ気持をその中に見出す。

①「天地正大の気ノ粹然として神州に
 鍾まる」天地正大の気を特攻の精神と
 置き替えてみたら、正にその通りである。
 特攻精神が凝集した所が、ほかでもない
 我が神州である。終戦後の8月19日、
 南満州大虎山飛行場に在った第五練習
 飛行隊の今田中尉以下10名は、97戦を
 駆って赤峰付近に集結しているソ連戦
 車群に体当り散華した。自ら称したの
 か後の人が呼んだのか「神州不滅特攻
 隊」と名付け、その碑が世田谷観音の
 境内に建っている。

②③「秀でては不二の嶽と為り」「発
 しては万葉の桜と為り」、この句が富
 嶽隊、万葉隊の語源であることは言う
 までもない。

④「凝っては百練の鉄と為り／鋭利蓋
 を断つ可し」(蓋はかぶと)、特攻機が
 敵艦に体当りする様を彷彿する。

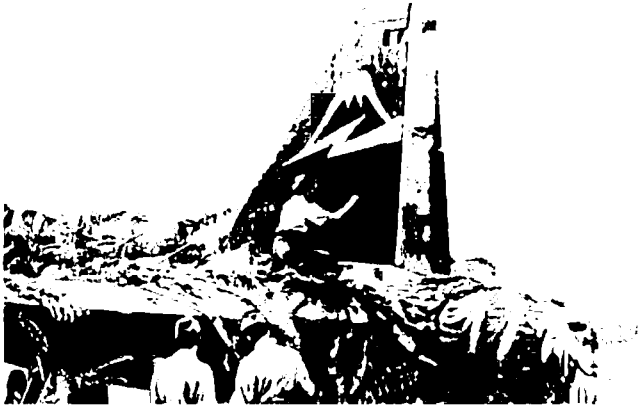
⑤「世として汗隆無くんばあらず／正
 気時に光を放つ」(世には盛衰があるが、
 非常の時にこそ正気は光を放つ)この
 詩には長い序文があるが、序文では、
 正気の屈伸、神州の汗隆焉に繋る、と
 述べている。どちらにしても正気を特攻
 の精神と置替えてみればよい。国家非
 常のときに特攻が現れ、特攻の精神が
 無ければ国は止む。

⑥これから後は日本歴史上の事例を挙
 げ、正気の存するところを述べているが、

東湖をして今の世に在らしめれば、勿論
 特攻隊を挙げるであろう。

⑦「乃ち知る人亡ぶと雖も／英並末だ
 嘗て泯びず」(人亡ぶとは肉体が無くなっ
 てもの意味)、特攻の精神は消滅するこ
 とはない。また消滅させてはならぬ。

ここからは主君齊昭を称え、幕府
 の為贖居させられたことに對し、またそ
 れと共に自分も動結に処せられたことに
 對する悲憤を述べている。



富嶽隊四式重

正気歌

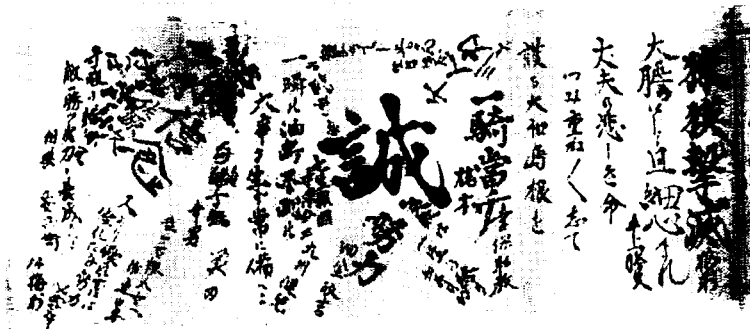
広瀬 武夫

死生命有り 論するに足らず
 鞠躬唯應に 至尊に酬ゆべし
 奮躍難に赴き 死を辞せず
 慷慨義に就く 日本魂
 一世の義烈 赤穂の里
 三代の忠勇 楠氏の門
 憂憤身を投ず 薩摩の海
 従容死に就く 小塚原
 ①或は芳野廟前の 壁と為り
 遺烈千載 鐵痕を見る
 或は菅家 筑紫の月と為り
 詞忠愛を存じて 冤を知らず
 見る可し 正気乾坤に満つるを
 一氣磅礴して 万古に存す
 嗚呼正気 畢竟誠の字に在り
 嗚嗚何ぞ必ずしも多言を要せん
 誠なる哉誠なる哉 斃れて已まず
 七たび人間に生れ 國恩に報いん

広瀬中佐の旅順港閉塞作戦は、当時
 特攻という言葉はなかったが、正に特攻
 作戦である。従ってこの詩は全編特攻
 隊員の心情に通ずるもので、中でも次の
 句は心引かれるものがある。
 ①「或は芳野廟前の壁と為り／遺烈千
 載鐵痕を見る」

かへらじとかねて思へば梓弓 なきか
 ずに入る名をそとどめん

「梓特別攻撃隊」は、五航艦が銀河24
 機と誘導の二式大艇2機をもって編成
 したもので、20年3月11日ウルシー泊
 地を目指し鹿屋を発ち、11機が突入と
 報告された。銀河塔乗42名、大艇塔乗
 12名が特攻と記録されている。



特攻隊員の

人を恋うる歌②

前号に続いてこの標題でまとめてみた。協会発行の「特攻隊遺詠集」等に掲げた歌もあるが、このような標題の下に再読してみると、感銘一入深いものがある。

母と子、兄と弟

緒方襄中尉

関西大学

第13期海軍飛行予備学生

20年3月21日戦死 22才

第1神雷部隊桜花搭乗員

一式陸攻に搭乗し鹿屋を出撃したが、敵機の要撃に遭い、桜花を発

進させる前に撃墜された。

妻中尉より特攻隊志願の決意を聞かされた母三和代さんは、今生の別れに子の任地に赴いた。

うつつ世のみじかきえにし母と子が

今宵一夜を 語りあかしぬ

帰宅後、襄中尉がひそかに母の鞆に入れてあった次の歌を発見した。

いざさらば我はみ国の山桜

母の身元にかへり咲かなむ

そのとき母の詠んだ歌

散る花のいさぎよきをばめでつ、も

母のこゝろは かなしかりけり

母のこゝろは かなしかりけり

緒方中尉は、兄徹と共に国史学の泰斗泉澄博士の門下に入り、連綿脈々として皇国を護持してきた我が青史に傾倒し、在学中に海軍に入り、更に特攻を志願した。

兄も行け我も果てなむ君の辺に

悉々果てむ 我が家の風

兄徹も京都帝大より学徒出陣、第12期海軍飛行予備学生、19年12月25日ミンドロ島にて戦死した。

「我が家族に」と題する詩集を、19年7月に当時いた千島から郷里に送った。その中の「喪とともに」には、二人を隔つる緯度二十度、兄は北にあり 弟南にあり

その昔 肩を並べて通ひし中学生

靴古びて今は家になり

年を経て 空に真赫な焰燃え 正義

凄壮の戦 日に日に苛烈なり

二人また 肩を並べて空に向う 我

が家のつたなき兄弟

生命を捨てて、空に伝統を創らむとす 此の家の伝統

兄弟の奮闘如何にかかる 喪、徹

いみじくもつけ給ひし父の魂

名を刻みて ともに進まん 兄は北

にあり 弟南にあり

父と子

根尾久男中尉

早稲田大学

第13期海軍飛行予備学生

20年3月11日戦死 22才

菊水部隊特別攻撃隊銀河に搭乗

鹿屋を出撃し、長駆西カロリン諸

島のウルシー泊地攻撃に向った。

中尉は早大在学中、大東塾の歌塾

「ひむがし」の同人として、尽忠の一念を歌に託し、陣中から父に送った。

父もまたこれに歌をもつて答えた。

(子)

いさみ来て今に思えばかなしけり

なが年月の 父の恩愛

君がため常に捧げし身なれども

いよいよなごる 年となるらむ

(父)

奉父上 昭和二十年三月十一日朝

大君の勅かしこむ武夫は

あだし空母に砕け散るべし

(父)

散華の報に接し

身をもつて君につかへし真心は

吾子ながらも尊とかりけり

(以上二件は靖国神編「いざさらば我

はみくにの山桜」に拠る)

残りし人の思い

(弟)

回大搭乗20年5月27日散華

千葉二郎一飛曹の妻弟

兄征きし瀬戸の小島に光りあり

戦の跡 のこす清も

挺進第三聯隊は、第二挺進団(高千穂空挺部隊)の先陣として、19年10月24日動員下令、翌々日の晩は日豊線川南駅を発って、乗船地佐世保に向った。慌ただしい別れだった。残された妻は詠う。この人達の夫は皆、レイテ降下作戦に参加して、帰らぬ人となった。

さらばとて夫の握れるたくましき

み手のぬくもり 今も残れり

我が心つつろなる時ありし日の

夫を偲びて 心なごめり

中野光義中尉の妻

迎え火をたけば父様飛行機に

乗ってくるかと 吾子は問うなり

父在まさねば動くあれよと子を論し

おのをさすとす 淋しくもあるか

梅野九中尉の妻

父在まさねば動くあれよと子を論し

おのをさすとす 淋しくもあるか

梅野九中尉の妻

父在まさねば動くあれよと子を論し

おのをさすとす 淋しくもあるか

梅野九中尉の妻

父在まさねば動くあれよと子を論し

おのをさすとす 淋しくもあるか

梅野九中尉の妻

父在まさねば動くあれよと子を論し

おのをさすとす 淋しくもあるか

梅野九中尉の妻

父在まさねば動くあれよと子を論し

おのをさすとす 淋しくもあるか

梅野九中尉の妻

父在まさねば動くあれよと子を論し

おのをさすとす 淋しくもあるか

梅野九中尉の妻

人間魚雷創始黒木博司と平泉澄

国史学の泰斗平泉澄先生は、奉職していた東京帝大だけでなく、多くの大学生等に門下生がいた。人間魚雷の創始者黒木博司もその一人だった。

黒木大尉は19年9月7日大津島で訓練中に殉職するのであるが、その葬儀は戦後の21年11月7日、郷里飛騨の下呂町禅昌寺で斎行され、通夜は前日同町の自宅で行われた。通夜の席上における平泉先生の挨拶が、ある書物に全文載っているが、(黒木少佐の行動は)後世子孫の為に非常な力となり、永久に残るものと、讃えている。そして最後に本日(の)通夜はすべて簡単に省略されるので、神式ならば祝詞、佛式ならば御経がありますが、今日はそれもない為、私の詠みました歌をよみ上げさせて頂き度いと申出ている。その歌は、

黒木少佐を弔う

一、秋ふけて 飛騨の山々

もみじばに 映ゆるを見れば

想ひいづ 純忠の士

一生涯 頂天立地

報國の 丹きまごころ

二、笑止なり 世の顯官

廟堂の 高きに立てど

情報は 余すなけれど

見通さず 國の行末

徒らに 月日を送る

三、君思ふ ま心をのみ

唯一の たよりとなして

眺めれば 火を観る如し

盟邦の くらき運命

わが國の 苦しき歩み

四、眠られぬ 夜をば徹し

血もて書く 非常の策

謹みて 上に献じつ

浪くゞる 快死の術

難きをば 自ら擔う

五、皇國に 幸しありせば

いしぶみに 黄金ちりばめ

琅玕の 墓をも立てて葬儀

いさをしは 村々伝へ

口々に ひろく讃えむ

六、今集う 友わづかにて

とぶらひは 寂しくあれど

天かけり 見ませみ盡よ

血に泣きて 沈める月の

消えやらぬ 影悲しむを

昭和丙戌霜月四日朝草之

平(花押)

下呂信貫山楠公社境内に昭和39年に

回天会によって「回天」碑が建立され

たが、主碑の横に平泉先生の歌碑が建

てられた。その碑文、

回天の壮挙は世の驚きにしてその忠

烈は人の感銘する所なりここに創業

者黒木博司少佐を敬慕する人々相計

り少佐の筆になる回天の二字を石に刻して郷里下呂に建て之を顕彰すよりて今歌をつらねてその志を伝へその功をたへむとするに調拙くして意を達する能はざるを恥す

祖國今すでに危しいかにせむ

何をすべきか思ひわづらふ

身をすてて國にむくいむ一念の凝りて生れぬ魚雷回天

只一人魚雷いだきて波くぐり

おこる敵艦粉にくだかむ

百千のいかづち一時に落つること

敵艦みぢんにくだけ飛び散る

その姿目にこそ見えぬま心とは

に守らむ父母の國

昭和三十九年春

平泉澄泣血拜書

ますらをのかなしきいのち

三井甲之という優れた歌人がいた。

昭和28年に71歳で没したのであるが、

この人が昭和2年に作った歌

ますらをのかなしきいのち

つまかさね

つまかさねまもる大和島根を

この歌は「敵機関長福山氏をしぬび

まつる」という九首の連作の中の一つ

で、その年の8月24日、島根県三保関

沖で夜間演習中に、駆逐艦、敵・葦の

2隻が衝突沈没し、死者119名を出すと

いう大事故があった。このとき知人である福田少佐の殉職を悼んで詠まれたものであるが、今次大戦末期の特攻隊員を偲ぶ歌にふさわしいので、特攻隊員の寄せ書によく見受けられる。

大石政則少尉は東京帝国大学法学部

2年在学中に学徒動員で海軍に入り、

第14期飛行科予備学生となり任官、八

幡神忠隊に属し、20年4月28日97艦攻

に搭乗し串良を発進、沖繩近海の敵艦

に突入散華したが、母親に宛てた遺書

の一節

「一二三〇発進、沖繩周辺の敵輸送

船に対し痛快なる突入を決定します。

仮令途中にて墜されることがあつて

も、戦果はなくとも、二十代の若武

者が、次から次へと特攻攻撃を連続

し、ますらをの命をつみ重ねつみ重

ねして、大和島根を守りぬくことが

できれば幸ではありませんか」

この文面三井甲之の歌が念頭にある

ことは間違いない。歌人泉下に在って

如何に見給うか、この歌碑は歌人の郷

里甲府の山県神社にあると聞く。

特攻隊と関係ないが、この人の秀歌を一首、

心しる友とかたればこころなごみ

ながるる涙 とどめかねつも

劇映画「ホタル」

特撰二期 田中市郎衛門

去年の晩秋、突然東映のT助監督から知覧町から紹介されたので劇映画「ホタル」の製作に協力して貰えなにかとの電話を受けた。

その折、「昔前同じ東映の「きけわだつみのこえ」の製作に協力した折、著名なシナリオライターが陸軍の出来ごとを海軍にすり替えてしまい、試写をみた我々一同は大いに失望した苦い思いをしたことが思い出され、慎重に対応することにした。

映画は長年連れ添った夫婦の愛情物語りが主軸をなすものであるが、主人公が元特攻隊員であるという設定から当時の特攻隊員の様子が描かれているというものであった。

もとよりドキュメンタリーとは違い、映画の世界のことであり、史実を忠実に再現することはできないが、なるべく忠実に製作したいとのことであった。間もなく速達便で依頼文と資料が送られてきたが、その資料には企画会議で主役を演ずる高倉健が「今、語り継がないと忘れられてしまうようなことも映画なら残していけるんですよ」という記事と、そんな言葉に対し、降

旗監督は「昭和という激動の時代を生きぬいてきた我々が、今、活動屋として、二十一世紀に語り継がれる作品を作ればいいですね。新しい世紀に残るものを」と応えたという。

この記事を読んで心を動かされ、事務局長と図り、知覧会の戦友に連絡をとり協力することを約した。

数日後、我々は肌寒い日であったが東映の大泉撮影所で特攻隊員たちの敬礼の仕方、飛行機上の手信号等の所作指導、小道具等を指導することになった。リハーサルは特攻隊員を送る場面が主であったが数十名の俳優全員が頭を丸め真剣そのもので迫力があり、當時を思い出し身のひき締る思いがした。ただ特攻隊員全員が救命胴衣を着けていたり、見送る整備兵が襟布を着用していなかったりしたのでその場で注意した。その他、所作の指導をし、降旗監督や関係者と懇談して時を過ごした。

帰宅して題本をみて知覧特攻平和会館や富屋旅館が何度も出てくることを知り、早速赤羽礼子さんにも連絡をとりお互いに協力することを約した。

製作の高岩東映社長は「第一稿を読んだ泣きました。高倉さんを中心とした鉄道員チームという魂の結合体が結果して、日本映画史に残るような作品を作って欲しい。また、いち早くアジ

アに注目していた私が最も敬愛する故徳間康快氏の意志をついでこの映画をアジアへ、そして全世界へむけて発信したい。二十一世紀に生きるものへの贈るメッセージとして全力を尽くす覚悟です」と資料に掲げてあった。撮影は十二月初旬クランクイン、東京でのセット撮影の他、八甲田山、鹿児島、韓国などのロケーションを行い、三月中旬クランクアップの予定が順調に進められており五月二十六日に公開されるとの連絡があった。

新聞報道によれば、作品の日本公開に先だってハリウッドのメジャー会社に世界配給を決めたのは史上初めてであると報じている。成功を祈ってやまない。

また昨年終戦記念日にN・H・Kが「学徒出陣」をテーマに放映するということで教養番組部のTプロデューサーからの要請で、当時の日本ニュースに映像がはっきりしている人、当時日記を克明につけていたという制約があり特撰関係者を数名推せんし、二名の方が出演し多くの視聴者に感銘を与えたが、本年も「クローズアップ現代」を担当するKディレクターから「特攻」の番組を八月十五日に放映するので協力して貰いたいとのことで、既に資料を送り、また本会事務局にも協力をお

願いしているところである。

戦後五十六年を経過し、戦争の苦しさを知る人も年を追って減少し、加えて戦前のことは総て否定する戦後教育により、戦争を知らない世代が国民の大部分を占めるようになった今日、老境に達した吾々としては、改めて青春時代を回想し、困難に際し学業を捨て共に戦い「永遠の平和を希求し乍ら志半ばにして散華した英霊」の遺志を継ぎ「日本人としての心」をこの乱世の道しるべに、語り部となつて若い世代に伝承しなければならぬものと思料しております。

〔単行本領布〕

○特攻隊遺詠集

A5版 221ページ 二、〇〇〇円

○B129との戦

A5版 164ページ 一、五〇〇円

○長い日

A5版 120ページ 一、〇〇〇円

○愛は終り無く

A5版 209ページ 一、五〇〇円

○遺書遺詠に偲ぶ特攻隊員の心情

A5版 60ページ 六〇〇円

○特攻隊員の日記

A5版 70ページ 七〇〇円

電話・葉書で申込み下されば、郵便払込用紙と現品送付。領布価は送料別

評議員

岩田辰夫殿

3月9日逝去

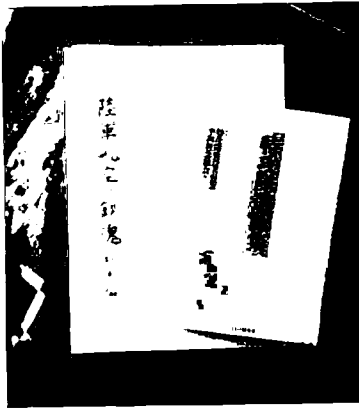
岩田辰夫君を憶う

田中賢一

この人と親しく辱交を得たのは、平成5年航空碑奉賛会で「陸軍航空の鎮魂絵集編」を作るときだった。この本の主体は前編第二部の「全陸軍航空部隊略歴」にあるが、その半はこの人の執筆に係る。つぎに共に携わったのは、平成8年特攻慰霊協会で「特攻隊員遺詠集」を作ったときである。岩田君直接の担当は陸軍航空と記録されているが、全般の企画、各担当者から出てくる原稿の取りまとめ、排列、更には付録や索引の作成など、繁雑な業務一切を遂行された。これらは皆愛国の至情の発するところと、感銘口ならぬものがある。

御逝去の知らせを受け、葬儀に参上せねば申訳ないが、私の健康許さないので、次の弔電を差上げた。

春とはいえ肅寒き朝 君が訃音に接しぬ 抗ガン剤にて頭髪失いぬと事もなげに話しありしも 航空の勇者 病に勝たざりしか 君とは航空



碑奉賛会及び特攻慰霊協会にて 共に凶書編纂に携わり 深きえにしを 生ぜり 国に殉せし英霊の遺徳を後世に伝えんとする情熱には かねがね畏敬の念抱きありて 我等余録の 齢なるが如きも 混濁の世に在りて 邦家の為なお尽すべきことあり 君を失いて痛恨極りなし 君が心魂こめて作りし「特攻隊員遺詠集」を君が遺書と心得 之が普及に努めんとす 君幽界に在りて見守り給え

元第一挺進団長

中村勇大佐の手記

義烈空挺隊の遺品に憶う

補足

前号紙面の都合で末尾を少し載せきれなかったので、ここに補足する。

なお同大佐の手記は、このあと出撃を見送った場面のことに続くが、それは会報の23号に掲載済である。

(前号に続き血書と遺墨の途中から) この寄書には渡部小隊の気風が溢れている。最古参分隊長の山城金榮准尉は沖繩出身であった。故郷を敵に奪われた恨みも激しかったが「骨を故山に埋める俺は果報者だ」と口癖のように言っていた。世話好きであった准尉のこと、今でも天上で沖繩巡覧の案内役を買って出ていることだろう。

義烈空挺隊第二菅田(寿美)小隊遺墨集

心ろト問ハレ

何故に碎ケン身ソト人間ハバ

ソレト答ヘン大和魂

梶原少尉(大分)

辱知 田中賢一

山崩し海をも干す我等の意気

今村曹長(長野)

忠孝 前田曹長(山口)

報国 大山曹長(長野)

直進 森井軍曹(宮崎)

孤島の鬼 長谷川伍長(島根)

必爆碎 川崎伍長(滋賀)

馬は南へ走る 藤村曹長(奈良)

一片の赤心一の誠心 大浦曹長(長野)

至誠 佐藤正曹長(福島)

大君のへに散るを惜しまぬ若櫻 吉川軍曹(新潟)

風雨々帝都寒壯士二度去不還 門山軍曹(千葉)

生れては死すべきものとのものふが 散りて悔なき若櫻花 石田伍長(兵庫)

生も死も吾もなし唯国の柱となる 遠藤伍長(福島)

正直元氣 宮本伍長(広島)

必仇討 西潟伍長(東京)

呑敵 馬場木伍長(函館)

闘魂 津隈伍長(宮崎)

万葉山桜香日東 田村伍長(東京)

昭和二十年元旦 小隊員筆を貫ねて 關志に燃ゆ 寿美記